タターガタ・アビダンマ

麻原彰晃 著

Tathāgata Abhidhamma

真理勝者 絶対最勝の法則

第三誦品

サキャ神賢の在家信徒の実相

タターガタ・アビダンマ

麻原彰晃 著

Tathāgata Abhidhamma

真理勝者 絶対最勝の法則

第三誦品

サキャ神賢の在家信徒の実相

序

世界には多くの仏教国が存在している。しかし、そのほとんどの仏教国は、わたしが世界を回った限りにおいては、真実の仏教を理解することなく、ただ名目上の仏教徒であるという国民の集合体としての仏教国であるように思われる。

その理由は、いくら仏像を拝んだとしても、それは第一段階の帰依であり、しっかりと仏教の教え、つまり真理の法則を記憶し理解しない限り、真の仏教の後継者とはいえず、真の仏陀のことはいえないのだということを忘れてい

ることから来る、まさに悲しい状態がそこに存在しているように、わたしには思われるのである。

そこで、『タターガタ・アビダンマ 第三誦品』においては、仏陀の在家の高弟、ここでは、ヴェールカンタキー・ナンダマーター帰依信女を一人の模範的な在家の帰依信女の一人として、彼女がどのような実力を持ち、そして、どのような経典を学んでいたかということを題材とし、真の在家仏教徒のあるべき姿をここに再現してみたいと考えるのである。

このナンダマーターの話にわたしが出くわしたのは、去年の十二月である。そして、そのときわたしは、やはりさすがに真理勝者がこの世に現われられたときの在家信徒のレベルというものは、大変高いものだなあと驚嘆したもの

である。そして、このレベルが世界の仏教徒に浸透してこそ、真の仏教の教えというものが、世界に在家として伝わったことになると考えたものである。

そして今回、わたしの中で、皆さんにこの法則について提供する構想がまとまったので、ここに『タターガタ・アビダンマ 第三誦品』として提供する次第である。

いつものことながら、『タターガタ・アビダンマ』は、わたしの高弟の一人であるヴァンギーサ、および『サキャ神賢直説根本仏典』翻訳チームの弟子たちの大いなる協力によって、世に出せることに感謝したいと思う次第である。

一九九二年七月二十九日　午後四時三十六分

麻原彰晃

目次

タターガタ・アビダンマ

Tathāgata Abhidhamma

真理勝者 絶対最勝の法則

第三誦品
サキャ神賢の在家信徒の実相

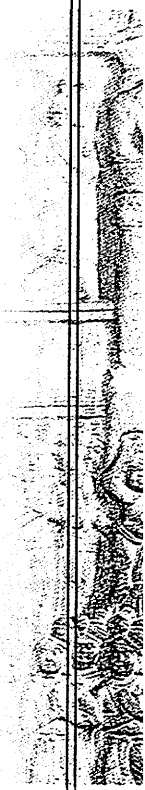
●序 —— 1

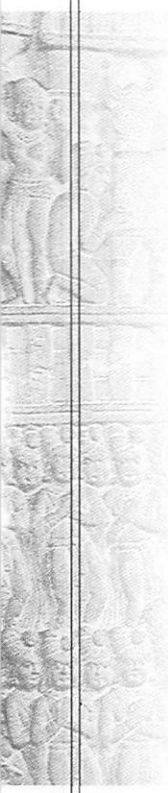
❖ 第一章『パーラーヤナ（最高の要点）』への遭遇 —— 11

一、『ナンダマーター』Nandamātā —— 12

●真理勝者の在家の弟子たちが朗唱した経典 —— 12

●ナンダマーター —— 13





二、ナンダマーターの素晴らしく格別な法則――23
●『最高の要点』の読経――23
●守庶民外傷天との対話――25
●守庶民外傷天の功徳へ――26
●息子に対して動揺しない心――29
●夫に対して動揺しない心――30
●意識によっても浮気しないこと――33
●ザンゲでの卓越性――34
●四つの静慮の達成――34
●五つの下位に結びつけるきずなの捨断――36
●在家の修行のポイント――37

第二章　解脱・悟りについてあらゆる角度から説き明かす、最高の要点『パーラーヤナ』とは ―― 39

一、『パーラーヤナ』Pārāyana ―― 40
- 解脱・悟りへのガイダンス ―― 40
- 経節・最高の要点品 ―― 41

二、骨子の詩句 ―― 131
- 愛欲本質神との対話 ―― 131
- 愛欲本質神の世界におけるサキャ神賢の認識 ―― 134
- 『パーラーヤナ』の三つのポイント ―― 136
- テレパシーによる救済 ―― 139
- 真理を求めて ―― 145

●頭と頭のあちこちが割れること——149

三、最高の要点——151

●意識を固定する非神秘力——151
●〝流れ〟の防止と自制——153
●心の要素と形状・容姿の打破——154
●三つの要素の打破と進展——155
●真我独存と中道——158
●犠牲祭の意味——160
●愛欲本質神に対する犠牲祭——161
●出生と老いを渡る——162
●苦しみが生じる因——164
●喜悦・居所・識別からの解放——166
●疑念や質問の無意味さ——168

● 遠離の法則 169
● 輪廻の大海を渡る方法 171
● 認知離解脱 173
● 離解脱後の状態 174
● 最終解脱の状態 175
● 神賢の条件 177
● 解脱の要点 179
● 不消の煩悩破壊 181
● 離解脱の三つの要素 183
● 神賢の要素 184
● かの岸とは異なる〝陸〟 186
● 安穏の条件 187
● 死の軍勢を破る方法 189
● 認識離解脱 191

●輪廻転生のきずな——192
●識別の打破——193
●真理勝者のようになるには——194
●空の実態——196
●身体のとらわれの捨断——198
●渇愛からの解放——200
四、かの岸への軌道——202
●〝方便〟の位置づけ——202
『最高の要点』質問一覧——204
言語対比表——212
索引——227

第一章

『パーラーヤナ（最高の要点）』への遭遇

一、『ナンダマーター』 Nandamātā

◉真理勝者の在家の弟子たちが朗唱した経典

この本の中心的経典は、第二章に掲げる『パーラーヤナ』である。しかし、その『パーラーヤナ』が、在家の霊的ステージの高い高弟たちに暗唱されていた経典であるかどうかを皆さんに指し示すために、まず、『パーラーヤナ』という経典の出てくる『ナンダマーター』という経典をここに掲げたいと思う。

この経典は、まさに真理勝者の在家の弟子たちがどのような経典を読み、そしてどのような神秘的力、あるいは静慮（じょうりょ）・サマディへと入っていたのかがよくわかる経典である。一緒に楽しみながら、しっかり読んでいきたいと思う。

◉ナンダマーター

一　このようにわたしは聞いた。

あるとき、聖者サーリプッタ（次に来る子供）と聖者マハーモッガラーナ（偉大なる乗り物の軌道）はダッキナーギリ（南の山岳）において、大向煩悩滅尽多学男出家教団と一緒に動き回って生活しながら旅行していた。

ところでそのとき、ヴェールカンタキー・ナンダマーター（とげのある竹のような喜悦の母）帰依信女は、夜の明け方に起床し、『最高の要点』を声を出して唱えていた。

ところでそのとき、守庶民外傷天の大王はまさに何かの職務のために、北の方角から南の方角へ行き、実に守庶民外傷天の大王は、ヴェールカンタキー・ナンダマーター帰依信女が『最高の要点』を声を出して唱えているのを聞いた。聞くと、話の終わりを待ってとどまった。直ちに、ナンダマーター帰依信女は『最高の要点』を声を出して唱えることを終えて、黙った。直ちに、守庶民外傷天の大

王はナンダマーター帰依信女の話の終わりを知り、大いに喜んだ。
「素晴らしいことだ、姉妹よ。素晴らしいことだ、姉妹よ」と。
「ところでだれですか、その顔が神の恩恵をもたらす人よ」と。
「姉妹よ、わたしはあなたの兄弟である守庶民外傷天の大王だ」と。
「素晴らしいことです、その顔が神の恩恵をもたらす人よ。少し前このわたしによって話された、この法則の要点、これがあなたへの接待となりますように」と。
「素晴らしいことだ、姉妹よ。そして、まさにこれはわたしへの接待となろう。明日、サーリプッタとマハーモッガラーナを長(おさ)とする向煩悩滅尽多学男出家教団が、朝食を行なわずにヴェールカンタカ（とげのある竹のようなもの）に来るだろう。そして、その向煩悩滅尽多学男出家教団に給仕して、わたしに寄贈を捧げよ。そして、まさにこれがわたしへの接待となるに違いない」と。
二　直ちに、ナンダマーター帰依信女は、その夜が経過してから、自分自身の所で、極妙の硬い食べ物と軟らかい食べ物を用意させた。なおまた、サーリプッタ

とマハーモッガラーナを長とする向煩悩滅尽多学男出家教団は、朝食を行なわずにヴェールカンタカに入った。直ちに、ナンダマーター帰依信女はある下男に呼びかけた。

「来なさい。いいかい、下男よ、あなたは大庭園に行って、向煩悩滅尽多学男出家教団に時を告げなさい。『尊者よ、奥様ナンダマーターの所で食事の用意ができました。時間です』」と。

「わかりました、奥様。」

と、実にその下男はナンダマーター帰依信女に対して承諾し、大庭園に行って、向煩悩滅尽多学男出家教団に（食事の）時を告げた。

「尊者よ、奥様ナンダマーターの所で食事の用意ができました」と。

直ちに、サーリプッタとマハーモッガラーナを長とする向煩悩滅尽多学男出家教団は、早朝正装し、上衣と鉢を持って、ナンダマーター帰依信女の所に行った。行くと、用意された座に座った。直ちに、ナンダマーター帰依信女はサーリプッ

タとマハーモッガラーナを長とする向煩悩滅尽多学男出家教団に、極妙の硬い食べ物と軟らかい食べ物によって、自らの手で満足させ、存分にもてなした。

なおまた、聖者サーリプッタが食べてしまって、手で鉢を置いたとき、ナンダマーター帰依信女はそばに座った。そばに座ったナンダマーター帰依信女に、実に聖者サーリプッタはこう言った。

「ところで、ナンダマーターよ、だれがあなたに向煩悩滅尽多学男出家教団の到着を告げたのか」と。

「尊者よ、ここにわたしは、夜の明け方に起床し、『最高の要点』を声を出して唱え終え、黙りました。直ちに、尊者よ、守庶民外傷天の大王がわたしの話の終わりを知って大いに喜びました。

『素晴らしいことだ、姉妹よ。素晴らしいことだ、姉妹よ』と。

『ところでだれですか、その顔が神の恩恵をもたらす人よ』と。

『姉妹よ、わたしはあなたの兄弟である守庶民外傷天の大王だ』と。

『素晴らしいことです、その顔が神の恩恵をもたらす人よ。少し前このわたしによって話された、この法則の要点、これがあなたへの接待となりますように』と。『素晴らしいことだ、姉妹よ。そして、まさにこれはわたしへの接待となろう。明日、サーリプッタとマハーモッガラーナを長とする向煩悩滅尽多学男出家教団が、朝食を行なわずにヴェールカンタカに来るだろう。そして、その向煩悩滅尽多学男出家教団に給仕して、わたしに寄贈を捧げよ。そして、まさにこれがわたしへの接待となるに違いない』と。

すなわち、この布施の功徳と利益は守庶民外傷天の大王の楽となりますように」と。

三　「素晴らしいことだ、ナンダマーターよ。格別なことだ、ナンダマーターよ。全く、このように大いなる如意とこのように偉大なる能力のある愛欲神の息子、守庶民外傷天の大王と直面して共に話したからだ」と。

「実にわたしにとって、尊者よ、素晴らしく格別な法則はこれだけではないので

す。わたしには他にも素晴らしく格別な法則があります。

尊者よ、ここにわたしには、ナンダ（喜悦）という名前の親愛で愉快な一人の劣等の息子がいましたが、まさに何かの報いを受けて、国王たちが彼を力ずくで連れ去り、生命を奪おうとしていました。しかし、尊者よ、実にわたしは子が捕らえられたとき、あるいは捕らえられているとき、あるいは殺害のとき、あるいは殺されているとき、あるいは攻撃されたとき、あるいは攻撃されているときに、心に対して（真理の教えに対する）意見の食い違いを証智することがなかったのです」と。

四「素晴らしいことだ、ナンダマーターよ。格別なことだ、ナンダマーターよ。全く心の起因も欠点をなくさせているからだ」と。

「実にわたしにとって、尊者よ、素晴らしく格別な法則はこれだけではないのです。わたしには他にも素晴らしく格別な法則があります。

尊者よ、ここにわたしには、逝って、ある人食い鬼神の子宮に流転した主人が

いましたが、彼はまさにその以前の姿をわたしに現わしました。しかし、尊者よ、実にわたしはこれによって、心に対して（真理の教えに対する）意見の食い違いを証智することがなかったのです」と。

五　「素晴らしいことだ、ナンダマーターよ。格別なことだ、ナンダマーターよ。全く心の起因も欠点をなくさせているからだ」と。

「実にわたしにとって、尊者よ、素晴らしく格別な法則はこれだけではないのです。わたしには他にも素晴らしく格別な法則があります。

尊者よ、わたしは若い主人のまさに若い妻として連れてこられたときから、意識によっても浮気をすることがなかったのです。したがって、身によっては、どこに浮気することがあるのでしょう」と。

六　「素晴らしいことだ、ナンダマーターよ。格別なことだ、ナンダマーターよ。全く少しの心の起因でさえも欠点をなくさせているからだ」と。

「実にわたしにとって、尊者よ、素晴らしく格別な法則はこれだけではないので

す。わたしには他にも素晴らしく格別な法則があります。

尊者よ、わたしが帰依信女としてザンゲするときはいつも、何も教えの真相に意志して逸脱したことを証智することがないのです」と。

七　「素晴らしいことだ、ナンダマーターよ。格別なことだ、ナンダマーターよ」と。

「実にわたしにとって、尊者よ、素晴らしく格別な法則はこれだけではないのです。わたしには他にも素晴らしく格別な法則があります。

尊者よ、ここにわたしは願い求めるだけ、種々の愛欲からまさに遠離（おんり）して、種々の不善の法則から遠離して、有熟考有吟味にして、遠離から生じる喜と楽がある、第一の静慮を達成してとどまります。

種々の熟考と吟味を静止し、心の中に落ち着きがあり、心の集中状態があり、無熟考無吟味にして、サマディから生じる喜と楽がある、第二の静慮を達成してとどまります。

喜をもって、そして種々の離愛著と無頓着としてとどまり、記憶修習し正智して、そして身によって楽を覚え、ちょうど、聖人たちが『無頓着にして記憶修習を持つ楽の時を過ごす』と明かす、第三の静慮を達成してとどまります。

楽の捨断と苦しみの捨断から、まさに以前の種々の幸福と落胆の全滅から、不苦不楽にして、無頓着と記憶修習による純粋とがある、第四の静慮を達成してとどまります」と。

八　「素晴らしいことだ、ナンダマーターよ。格別なことだ、ナンダマーターよ」と。

「実にわたしにとって、尊者よ、素晴らしく格別な法則はこれだけではないのです。わたしには他にも素晴らしく格別な法則があります。

尊者よ、世尊が指し示された、これら五つの下位に結びつけるきずなは、わたしは自分自身において、それらの何も捨断されていないのを認めないのです」と。

「素晴らしいことだ、ナンダマーターよ。格別なことだ、ナンダマーターよ」と。

直ちに、聖者サーリプッタはナンダマーター帰依信女を、法則の話によって悟らせ、鼓舞し、目覚めさせ、誉め称えて、座から立って帰った、と。

[『より優れた部分の部門（アングッタラ・ニカーヤ）』第七節　第五　大犠牲祭品（マハーヤンニャ・ヴァッガ）　五〇　ナンダマーター]

二、ナンダマーターの素晴らしく格別な法則

◉『最高の要点』の読経

ところでそのとき、ヴェールカンタキー・ナンダマーター（とげのある竹のような喜悦の母）帰依信女は、夜の明け方に起床し、『最高の要点』を声を出して唱えていた。

ところでそのとき、守庶民外傷天の大王はまさに何かの職務のために、北の方角から南の方角へ行き、実に守庶民外傷天の大王は、ヴェールカンタキー・ナンダマーター帰依信女が『最高の要点』を声を出して唱えているのを聞いた。聞くと、話の終わりを待ってとどまった。直ちに、ナンダマーター帰依信女は『最高の要点』を声を出して唱えることを終えて、黙った。直ちに、守庶民外傷天の大王はナンダマーター帰依信女の話の終わりを知り、大いに喜んだ。

「素晴らしいことだ、姉妹よ。素晴らしいことだ、姉妹よ」と。

「ところでだれですか、その顔が神の恩恵をもたらす人よ」と。

「姉妹よ、わたしはあなたの兄弟である守庶民外傷天の大王だ」と。
「素晴らしいことです、その顔が神の恩恵をもたらす人よ。少し前このわたしによって話された、この法則の要点、これがあなたへの接待となりますように」と。
「素晴らしいことだ、姉妹よ。そして、まさにこれはわたしへの接待となろう。明日、サーリプッタとマハーモッガラーナを長とする向煩悩滅尽多学男出家教団が、朝食を行なわずにヴェールカンタカ（とげのある竹のようなもの）に来るだろう。そして、その向煩悩滅尽多学男出家教団に給仕して、わたしに寄贈を捧げよ。そして、まさにこれがわたしへの接待となるに違いない」と。

まず、この『ナンダマーター』の冒頭に「最高の要点」という言葉が出てくる。これが『パーラーヤナ』である。そして、この『パーラーヤナ』の音読、つまり、早朝の『最高の要点』の読経、これがヴェールカンタキー帰依信女の修行の一つであったのである。

◉守庶民外傷天との対話

ところで、守庶民外傷天とは第一天界の北の王であり、その配下が人食い鬼神なのである。そして、この経典は、ヴェールカンタキー・ナンダマーター帰依信女が、第一天界の王の一人、守庶民外傷天とこのように対話ができることを表わしている。

また、この守庶民外傷天にとっての最高の供養の一つが、『最高の要点』の読誦であり、それによって守庶民外傷天は、次の日にサーリプッタ、マハーモッガラーナという、サキャ神賢の二大高弟がそばを通ることを教え、よりいっそうヴェールカンタキー帰依信女に大いなる功徳を積ませることによって、その法則に対するお礼をしたのである。

そして、この第一天界の北の王である守庶民外傷天と対話のできるレベルであったということ。これこそが、ヴェールカンタキー帰依信女が有する、在家信徒としての特別な状態の第一番目なのである。

◉守庶民外傷天の功徳へ

直ちに、サーリプッタとマハーモッガラーナを長とする向煩悩滅尽多学男出家教団は、早朝正装し、上衣と鉢を持って、ナンダマーター帰依信女の所に行った。行くと、用意された座に座った。直ちに、ナンダマーター帰依信女はサーリプッタとマハーモッガラーナを長とする向煩悩滅尽多学男出家教団に、極妙の硬い食べ物と軟らかい食べ物によって、自らの手で満足させ、存分にもてなした。

なおまた、聖者サーリプッタが食べてしまって、手で鉢を置いたとき、ナンダマーター帰依信女はそばに座った。そばに座ったナンダマーター帰依信女に、実に聖者サーリプッタはこう言った。

「ところで、ナンダマーターよ、だれがあなたに向煩悩滅尽多学男出家教団の到着を告げたのか」と。

「尊者よ、ここにわたしは、夜の明け方に起床し、『最高の要点』を声を出して唱え終え、黙りました。直ちに、尊者よ、守庶民外傷天の大王がわたしの話の終わりを知って大いに喜びました。

「素晴らしいことだ、姉妹よ。素晴らしいことだ、姉妹よ」と。
「ところでだれですか、その顔が神の恩恵をもたらす人よ」と。
「姉妹よ、わたしはあなたの兄弟である守庶民外傷天の大王だ」と。
「素晴らしいことです、その顔が神の恩恵をもたらす人よ。少し前このわたしによって話された、この法則の要点、これがあなたへの接待となりますように」と。
「素晴らしいことだ、姉妹よ。そして、まさにこれはわたしへの接待となろう。明日、サーリプッタとマハーモッガラーナを長とする向煩悩滅尽多学男出家教団が、朝食を行なわずにヴェールカンタカに来るだろう。そして、その向煩悩滅尽多学男出家教団に給仕して、わたしに寄贈を捧げよ。そして、まさにこれがわたしへの接待となるに違いない」と。
すなわち、この布施の功徳と利益は守庶民外傷天の大王の楽となりますように」と。

ここでもう一つ、注意すべき点がある。それは、なぜヴェールカンタキー・ナンダマーター帰依信女が、サーリプッタやマハーモッガラーナをはじめとする真理勝者の弟子たちに供養しているにかかわらず、守庶民外傷天の功徳になるので

あろうか。

それは、守庶民外傷天が、サーリプッタやマハーモッガラーナが通過することをヴェールカンタキー・ナンダマーター帰依信女に伝えた、その果報なのである。つまり、もし守庶民外傷天がそのことを伝えなければ、ヴェールカンタキー・ナンダマーター帰依信女は、サーリプッタやマハーモッガラーナに対して特別な供養、つまりサーリプッタ、マハーモッガラーナをはじめとする多くの向煩悩滅尽多学男たちに供養することができなかったはずなのである。しかし、偉大な守庶民外傷天の知らせによってそれができたわけである。

これは、逆の意味を考えることもできる。つまり、情報において、もし誤った見解を広め、そして、それによって多くの人が傷つくとするならば、それはまた、大いなる悪い果報となるのである。

◉息子に対して動揺しない心

「実にわたしにとって、尊者よ、素晴らしく格別な法則はこれだけではないのです。わたしには他にも素晴らしく格別な法則があります。

尊者よ、ここにわたしには、ナンダ（喜悦）という名前の親愛で愉快な一人の劣等の息子がいましたが、まさに何かの報いを受けて、国王たちが彼を力ずくで連れ去り、生命を奪おうとしていました。しかし、尊者よ、実にわたしは子が捕らえられたとき、あるいは捕らえられているとき、あるいは殺害のとき、あるいは殺されているとき、あるいは攻撃されたとき、あるいは攻撃されているときに、心に対して（真理の教えに対する）意見の食い違いを証智することがなかったのです」と。

ヴェールカンタキー帰依信女の在家信徒としての特別な状態について、これからいくつか列挙される。

まず第一番目は、第一天界の北の王である守庶民外傷天と対話のできるレベルであったということ。

そして第二番目は、息子に対してかかってきた難事に対して、いっさい心の動揺をなすことなく、すべてを淡々とカルマの法則によって見極めることができたということである。

◉夫に対して動揺しない心

「実にわたしにとって、尊者よ、素晴らしく格別な法則はこれだけではないのです。わたしには他にも素晴らしく格別な法則があります。

尊者よ、ここにわたしには、逝って、ある人食い鬼神の子宮に流転した主人がいましたが、彼はまさにその以前の姿をわたしに現わしました。しかし、尊者よ、実にわたしはこれによって、心に対して（真理の教えに対する）意見の食い違いを証智することがなかったのです」と。

これは、ヴェールカンタキー帰依信女の夫が他界して、後に、人食い鬼神の子

宮へと転生した。そして彼が以前の姿、つまり夫の姿としてヴェールカンタキー帰依信女の前に現われたが、それに対して全く心を動かさなかったという話である。

オウム真理教の在家の修行は大変厳しい。ここで一つ、大変似た例を挙げたいと思う。

・わたしを呼びに来た主人　　金井峯子

末期のガンに侵され、あと二カ月の命と診断された主人が、オウム真理教の修行とＡＨＩ（オウム真理教附属医院）の治療によって普通人と全く変わらない状態で暮らしながら半年も延命し、安らかに命をひきとってから、一年ほど経ったときのことです。

その日、わたしは娘と共に、東名高速を東京へ向かっていました。午前二時。うとうとしかけたわたしは、ものすごい衝撃とともに路上に放り出されたのです。瞬間の出来事で何が何だかわからないままに、わたしの意識は一瞬途切れました。

気がつくと、娘の「お母さん！　お母さん！」と叫ぶ声が聞こえてきました。「ここにいるよ」と言ったつもりの言葉は、声になりませんでした。娘はすぐそばにいるのに、何かで隔てられているような不思議な感覚でした。

「ひょっとしたら、肉体を抜け出てしまったのかもしれない……。」

そう思って目を見開いてみたら、わたしは紫色に輝く美しい空間にいました。そのとき、主人の姿が白くぼんやりと見えたのです。

「ああ、お父さんだ……。」

わたしは薄れていく意識の中で、目の前の人影は主人であることを理解していました。

運び込まれた病院での検査の結果、首の骨が七カ所折れているとのことでした。「半身不随で、車イスの生活」という診断でしたが、その後、オウム真理教附属医院に転院し、約半年後には通常の生活を送ることができるようになりました。

後日、この出来事について尊師が、「意識堕落天に転生したご主人が、奥さんを呼びに来たのである」とおっしゃられましたが、あのときに見た紫色といい、けがをした箇所の首といい、どれも意識堕落天の象徴であったことを考えると、まさしくそうなのだろうと思います。

しかし、主人を認識したときの自分の気持ちについては、何も思い出すことはできません。もし、主人に対して心が動いたなら、何らかの思いは残っているはずなのに、わたしの心の中には何も残っていないのです。

◉意識によっても浮気しないこと

「実にわたしにとって、尊者よ、素晴らしく格別な法則はこれだけではないのです。わたしには他にも素晴らしく格別な法則があります。

尊者よ、わたしは若い主人のまさに若い妻として連れてこられたときから、意識によっても浮気をすることがなかったのです。したがって、身によっては、どこに浮気することがあるのでしょう」と。

この部分については、読んでいただければご理解いただけるだろうから、深く掘り下げる必要はないと思う。

◉ザンゲでの卓越性

「実にわたしにとって、尊者よ、素晴らしく格別な法則はこれだけではないのです。わたしには他にも素晴らしく格別な法則があります。

尊者よ、わたしが帰依信女としてザンゲするときはいつも、何も教えの真相に意志して逸脱したことを証智することがないのです」と。

これは、ヴェールカンタキー帰依信女が法則に照らし合わせてザンゲをするとき、ザンゲの項目が一つとして存在しないことを表わしているのである。まさに、類い稀な在家信徒といわざるを得ない。

◉四つの静慮の達成

「実にわたしにとって、尊者よ、素晴らしく格別な法則はこれだけではないのです。わたしには他にも素晴らしく格別な法則があります。

尊者よ、ここにわたしは願い求めるだけ、種々の愛欲からまさに遠離して、種々の不善の法則から遠離して、有熟考有吟味にして、遠離から生じる喜と楽がある、第一の静慮を達成してとどまります。

種々の熟考と吟味を静止し、心の中に落ち着きがあり、心の集中状態があり、無熟考無吟味にして、サマディから生じる喜と楽がある、第二の静慮を達成してとどまります。

喜をもって、そして種々の離愛著と無頓着としてとどまり、記憶修習し正智して、そして身によって楽を覚え、ちょうど、聖人たちが『無頓着にして記憶修習を持つ楽の時を過ごす』と明かす、第三の静慮を達成してとどまります。

楽の捨断と苦しみの捨断から、まさに以前の種々の幸福と落胆の全滅から、不苦不楽にして、無頓着と記憶修習による純粋とがある、第四の静慮を達成してとどまります」と。

いよいよ、ヴェールカンタキー帰依信女が四つの静慮を達成したことを表わしている部分である。つまり、サキャ神賢の在家の弟子でも、高いレベルになると四つの静慮を達成したことを表わしている。

もちろん、これが悟り・解脱に対して不可欠な、しかも最後の部分であることは言うまでもない。

◉五つの下位に結びつけるきずなの捨断

「実にわたしにとって、尊者よ、素晴らしく格別な法則はこれだけではないのです。わたしには他にも素晴らしく格別な法則があります。

尊者よ、世尊が指し示された、これら五つの下位に結びつけるきずなは、わたしは自分自身において、それらの何も捨断されていないのを認めないのです」と。

これは、五つの下位に結びつけるきずなの捨断である。五つの下位に結びつけるきずなについては、『タターガタ・アビダンマ 第二誦品』の一二四ページを参照されたい。

◉在家の修行のポイント

ここで大切なことは、まず心のこもった食（じき）の供養を行なう、あるいは、現代においては食だけではなく、金銭・物質的な布施を意味すると考えてよろしい。そして、その布施が終了した後に、その見返りとして法則を伝授されるのである。

これを繰り返し繰り返し行なうことにより、粗雑な徳を微細な徳へと変えていく。これが在家の修行だったのである。

第二章

解脱・悟りについてあらゆる角度から説き明かす、最高の要点『パーラーヤナ』とは

一、『パーラーヤナ』 Pārāyana

◉解脱・悟りへのガイダンス

いよいよ、ヴェールカンタキー・ナンダマーター帰依信女の読経していた『パーラーヤナ（最高の要点）』を、わたしたちは読むことができる。

この『パーラーヤナ』の中味は、十八のパートに分類されている。そして、それは悟り・解脱について、外道の質問に対してあらゆる角度からサキャ神賢が答えるという形をとっている。つまり、この経典は仏教における解脱とは何か、悟りとは何か、また、その到達した状態とは何かを説き明かした経典なのである。

したがって、この境涯がもし自己の中に体現されるとするならば、それはサキャ神賢の説き明かした個の解脱、個の悟り、真我の独存、これを達したこととなる。したがって、この経典の読経だけではなく、深い理解こそが、解脱・悟りのガイ

ダンスとなるのである。それを踏まえてしっかりと読んでいただきたいと思う。

◉経節・最高の要点品

一　骨子の詩句

九七六　無所有の状態を欲し、
熟慮によってかの岸に完全に到達した祭司が、
コーサラ（十分な貯蔵室）国の満足した都市から、
ダッキナーパタ（南の道）へ行った。

九七七　彼はアッサカ（馬を所有している所）と、
アラカ（巻き毛の場所）が共に座る境界にある、
ゴーダーヴァリー（大トカゲの小川）斜面において、
食物として集められたものと実によって住んだ。

九七八　そのまさに近い場所に村があり、
そして、そこは増大し、
そこから生じた収益によって、
大いなる犠牲祭をした。
九七九　大いなる犠牲祭を捧げて、
再び人里離れた住まいに入り、
彼が再び入ったとき、
他の祭司がこちらに来た。
九八〇　そして、足を痛め、のどが渇き、
歯の間には歯ぐそが付き、頭はちりにまみれて、
その彼は彼に至り、
五百金を懇願した。
九八一　バーヴァリ（水元素の多量の流れ）は、

その彼を見て、
座に招き、楽と善を質問し、
この発言を明言した。

九八二　「実にわたしに法則によって贈与されたものは、
すべてわたしにより解放した。
神聖な人よ、わたしを許可しなさい。
わたしに五百金があることはない。」

九八三　「もし、懇願しているわたしに、
尊者が贈り物として与えないのならば、
七日目にあなたの頭は、
七つの断片に破裂するぞ。」

九八四　支度して、そのペてん師は、
忌まわしいことを告知した。

彼のその発言を聞いて、
バーヴァリは苦しんだ。

九八五　食物を取れずに、乾燥し、
不運な出来事によって不運に取りつかれた。
および同様に、このような心に対して意識は、
静慮において楽しまなくなった。

九八六　恐れ、苦しんでいるのを見て、
美徳を懸命に試みる者である愛欲本質神（あいよくほんしっしん）は、
バーヴァリに至り、
この発言を明言した。

九八七　「彼は頭を認識せず理解していない。
彼はぺてん師で財産を欲しがっている。
頭や頭が割れることについての精通は、

彼には存在しない。」

九八八　「それなら、尊者がわかるなら、
質問されて、
その頭と頭のあちこちが割れることを、
わたしに言明してください。
あなたのその言葉を聞きたいのです。」

九八九　「わたしもそれはわからない。
ここで精通は存在しない。
というのは、この頭と頭のあちこちが割れることは、
勝者たちが見ることだからだ。」

九九〇　「それならそれで、この大地の円全体において、
だれが頭と頭のあちこちが割れることがわかるのか。
それをわたしに言明してください、

愛欲本質神よ。」

九九一　「カピラヴァットゥ（褐色の要素）の都市から出た、
世界の首長、
オッカーカ（たいまつのような）国王の子孫、
サキャ（まぶしく有能な他のために尽くす者）族の息子、
光をもたらす者。

九九二　祭司よ、全く彼は正覚者であり、
すべての法則に対して、かの岸に完全に到達し、
すべての証智の能力を勝ち取り、
すべての法則において眼ある人であり、
すべてを破壊する法則に達し、
愛取（あいしゅ）の撲滅において離解脱（りげだつ）している。

九九三　彼は覚者であり、

世尊であり、
眼ある人であり、
世界において法則を指し示す。
あなたは彼に至り、質問しなさい。
彼はあなたにそれを明らかにするだろう。」

九九四

「正覚者だ」と言葉を聞いて、
バーヴァリは有頂天になった。
彼の悲しみは少なくなり、
喜の増大を得た。

九九五

かのバーヴァリは大喜びし、
有頂天になり、喜びに満ちて、
愛欲本質神にそれを質問した。
「どちらの村において、

あるいは町において、
また、どちらの地方において、
世界の救世主がいるのですか。
その所へ行って、
正覚者、最も偉大な二本足に、
わたしたちは帰依したいものだ。」

九六　「サーヴァッティ（すべてのものがある）のコーサラ官邸において、
勝者であり、
広範な智慧を有し、
華麗で広大で頭の良い、
比ぶるものがなく無漏（むろ）である、
かのサキャ族の息子は、
頭のあちこちが割れることを知った、

九九七　ひとかどの指導者だ。」
そのときから、
熟慮によってかの岸に行く、
教え子の祭司たちに、
彼は呼びかけた。
「来なさい、青年男子たちよ。
言明しよう。
わたしの発言を聞きなさい。
九九八　世界において生じることがいつも得難い、
かの正覚者と広く知られた人が、
今日、世界において流転なさっている。
早くサーヴァッティに行き、
最も偉大な二本足を訪れなさい。」

九九九　「それでは、祭司よ、会ったとき、
どのように『覚者だ』と判断するのですか。
わたしたちがそれを判断できるように、
判断できないわたしたちに語ってください。」

一〇〇〇「全く、種々の聖典において、
偉大なる男性の種々の顕著な特徴が、
公表されており、
そして、段階的に全部で、
三十二数え上げられている。

一〇〇一　全身に偉大なる男性の、
種々の顕著な特徴がある者の方向は、
二つだけであり、
全く第三は存在しない。

一〇〇二　もし家で生活するならば、
この大地に勝利し、
暴力を用いず、兵器を用いず、
法則によって諭す。

一〇〇三　そして、もし彼が家庭生活の快適さを捨て、
家なき状態になり、禁欲生活を送るならば、
ベールが取り去られた、
正覚者、供養値魂、無上士となる。

一〇〇四　わたしの出生、家系、
そして、顕著な特徴について、
種々の聖典や教え子たちについて、
次にまた、
頭と頭のあちこちが割れることについて、

君たちは意識だけによって質問しなさい。

一〇五　遮蔽（しゃへい）がなく見る覚者という条件では、
意識によって質問した種々の探求に対して、
言葉によって解放するだろう。」

一〇六　バーヴァリの言葉を聞いた、
十六人の教え子の祭司たち、
アジタ（征服されない者）、
ティッサメッテッヤ（縁起の良い慈愛）、
プンナカ（いっぱいの者）、
それで、メッタグー（慈愛の心に富んだ働き）、

一〇七　ドータカ（洗われた者）、
ウパシーヴァ（シヴァ神に沿う者）と、
ナンダ（喜悦）と、

それで、ヘーマカ（素晴らしい者）、
トーデッヤ（駆る性質の人）、
カッパ（期間）の両者、
そして、賢者ジャトゥカンニン（鞭で裂く者）、
一〇〇八　バドラーヴダ（防御手段を持つ高級な尊者）、
ウダヤ（上向）と、
そして、祭司ポーサーラ（隆盛）も、
頭の良いモーガラージャン（空虚な王）と、
偉大な尊い人ピンギヤ（赤みを帯びた茶色の者）と。
一〇〇九　おのおのが弟子を持っており、
すべての者が世間すべてにおいて広く知られ、
静慮し、静慮を楽しむ、揺るぎない者であり、
過去の行ないを因として、

心に残り定着している印象の者であった。

一〇一〇　バーヴァリに敬礼し、
そして、彼に対して右回りの礼をなし、
彼らすべては結ばれた髪、
そして、黒いカモシカの皮革を身につけ、
北へ向かって出発した。

一〇一一　アラカのパティッターナ（安住すること）へ、
東にあるマーヒッサティ（芳香土の大地）へ、
そのとき、ウッジェーニー（克服する妻の場所）へ、
そして、ゴーナッダ（縛りつけられた牛の場所）へ、
ヴェーディサ（空間の中間点に属している町）へ、
ヴァナサヴハヤ（命名された林）へも、

一〇一二　コーサンビー（優雅な最高の人）へ、

そして、サーケータ（欲求したものを与える町）へも、
そして、最も偉大な都市サーヴァッティへ、
セータヴィヤー（閉ざされた場所）へ、
カピラヴァットゥへ、
そして、クシナーラ（クサ草を備えた城塞）の官邸へ、
パーヴァー（瞥護して吹き飛ばす場所）へ、
そして、ボーガ（楽しみの場所）市へ、
ヴェーサーリー（広大王によって作られた都市）へ、
マガダ（太陽の祭司のいる）国の都市へ、
そして、気に入って心を喜ばせる、
パーサーナカ（石のような場所）の神殿へ。
あたかものどが渇いた者が冷たい水に対するように、
あたかも貿易商が大きな利得に対するように、

一〇一三
一〇一四

あたかも熱に焦がされた者が日陰に対するように、
彼らは急いで山に登った。

一〇一五　そしてそのとき、
世尊は大勢の向煩悩滅尽多学男たちを前に置き、
あたかも林においてライオンがほえるように、
向煩悩滅尽多学男たちに法則を指し示していた。

一〇一六　あたかも束縛を離れた光のように光を出し、
十五夜の月のように完全に到来した、
正覚者をアジタは見た。

一〇一七　そして、彼の全身に完全な特徴を見、
近くにとどまり、
身の毛がよだつような歓喜を感じ、
意識によって種々の探求を質問した。

一〇一八「自明にしてください。
誕生を明言してください。
家系を明言してください。
有している顕著な特徴、
種々の聖典に関する徹底を明言してください。
祭司はどのくらいの者に伝授していますか。」

一〇一九「寿命は百二十歳、
そして、彼の家系はバーヴァリ、
彼の全身において三つの顕著な特徴があり、
三つの祭司の聖典に対し、

一〇二〇　顕著な特徴と伝承、
伴っている用語と伴っている儀式体系に対し、
かの岸に完全に到達している。

五百人に伝授し、有している法則においては、
徹底に至っている。」

一〇二「渇愛を叩き割った最も偉大なひとかどの人よ、
バーヴァリを区別するための顕著な特徴を、
説明してください。
わたしたちに不信を抱かせないように願います。」

一〇三「彼は舌で顔を覆い隠す。
まゆ毛の中には産毛がある。
外陰部は鞘に収められている。
青年男子よ、このように気づきなさい。」

一〇三　質問していることを全く何も聞かず、
種々の探求に回答なさったのを聞き、
すべての人々は喜びに満ち、

合掌がなされ、敬信の念を抱いた。

一〇二四『愛欲神か、あるいは神聖天か、
あるいは神々の王か、
あるいは同様に、スジャンパティ（献身的なひしゃくの夫）か、
だれがあなたに意識によって、
種々の探求を質問したのか。
だれに対してこれを、
返事としておっしゃったのだろうか。』

一〇二五「バーヴァリは、
頭と頭のあちこちが割れることを尋ねました。
世尊よ、それに回答してください。
尊い人よ、
わたしたちの不信を除去してください。」

一〇二六「頭とは非神秘力と気づきなさい。
種々の信と記憶修習とサマディによって、
決意と精進によってつながった神秘力が、
頭のあちこちが割れる状態である。」

一〇二七　これから、大きな敬虔な感情を抑えて、
青年男子は、
一方の肩に黒いカモシカの皮革をかけ、
両足に頭を落とした。

一〇二八「尊い人よ、眼ある人よ、
祭司バーヴァリは弟子たちと共に、
有頂天になった心と正しい意識で、
尊師の足にうやうやしくあいさつします。」

一〇二九「祭司バーヴァリは、

弟子たちと共に心安らかでありなさい。
そして、青年男子よ、
あなたも心安らかでありなさい。
長い間生きなさい。

一〇三〇　バーヴァリとあなた、あるいはすべて者の、
すべての不確さを、
意識において望むことは何でも、
機会を得ているので質問しなさい。」

一〇三一　正覚者によって、好機を得たので座り、
尊敬の念に満ちたあいさつの印として、
握りしめた両手を上方に捧げ、
そこで、アジタは真理勝者に第一の探求を質問した。

二　アジタ青年男子の質問

一〇三三「では何により世界は包囲されていますか。
では何により外に向かって輝きを発さないのですか。
では何が汚染か明言してください。
では何がそれに対する大きい恐怖ですか。」
と聖者アジタ。

一〇三三「アジタよ、
非神秘力により世界は包囲されている。
様々な欲求と怠惰より外に向かって輝きを発さない。
愛著（あいじゃく）を感じる対象が汚染だとわたしは明言する。
苦しみがそれに対する大きい恐怖である。」
と世尊。

一〇三四「種々の流れはいたるところに流れます。

種々の流れを何が防止し、
種々の流れを自制するか明言してください。
何によって種々の流れは弱められるのですか。」
と聖者アジタ。

一〇三五「アジタよ、
世界における種々の流れは、
記憶修習がそれらを防止し、
種々の流れを自制するとわたしは明言する。
智慧によってそれらは弱められる。」
と世尊。

一〇三六「尊い人よ、
まさに智慧と記憶修習、
そして、心の要素・形状・容姿について、

これを質問されたので、
わたしに語ってください。
これはどこで打破されるのですか。」
と聖者アジタ。

一〇三七「アジタよ、
この探求を質問したことについて、
わたしはあなたに断言する。
心の要素と形状・容姿とは全部打破される。
識別の滅尽によって、
ここでこれは打破される。」

一〇三八「尊い人よ、
この世には、
種々の推定された法則がある者たちと、

種々の有学、
種々の独断がある者たちがいますが、
それらの進展を質問いたしますので、
智慧ある博識な方はわたしに語ってください。」

一〇三九「種々の感覚の喜びの対象に対して、
熱望せず、意識を平穏にし、
向煩悩滅尽多学男は、
すべての法則における善を記憶修習し、
托鉢修行者として歩き回りなさい」と。

三　ティッサメッテッヤ青年男子の質問

一〇四〇「この世界において、
だれが合一し喜ぶ人なのですか。

だれに種々の心が乱れたことがあることはないのですか。
だれが双方の極端な状態の証智によって、
真ん中において熟慮し、
けがされることがないのですか。
だれを偉大な男と明言するのですか。
だれがこの世で、耐えきれない欲望を圧倒したのですか。」
と聖者ティッサメッテッヤ。

一〇四一「メッテッヤよ、
種々の感覚の喜びの対象において、
神聖行をなす、すなわち、
渇愛を離れ、
いつも記憶修習し、推定し、
煩悩破壊する向煩悩滅尽多学男、

彼に種々の心が乱れたことがあることはない。

一〇四二　彼は双方の極端な状態の証智によって、
真ん中において熟慮し、
けがされることがない。
彼を偉大な男とわたしは明言する。
彼はこの世で、
耐えきれない欲望を圧倒した。」
と世尊。

四　プンナカ青年男子の質問

一〇四三「欲望や性欲がなく、
根本に対して洞察に満ちた人に、
探求のために現われ、こちらに来ました。

何を目的とし、この世界において、
尊い人たち、適任の人たち、
武人たち、祭司たちは、
愛欲本質神たちに対して、
独断の方法で犠牲祭をしたのですか。
わたしはそれを世尊に質問いたします。
わたしにそれを明言してください。」
と聖者プンナカ。

一〇四四「プンナカよ、
この世界において、これらのどんな、
尊い人たち、適任の人たち、
武人たち、祭司たちも、
愛欲本質神たちに対して、

独断の方法で犠牲祭をしたのは、
プンナカよ、
この世における最高の状態を望み、
老いに染みつかされて、
犠牲祭をしたのである。」
と世尊。

一〇四五「世尊よ、
この世界において、これらのどんな、
尊い人たち、適任の人たち、
武人たち、祭司たちも、
愛欲本質神たちに対して、
独断の方法で犠牲祭をしたのですが、
尊い人よ、

犠牲祭のやり方において、
怠惰でない彼らは、
出生と老いとを渡ったのでしょうか。
世尊よ、
わたしはそれを質問いたします。
わたしにそれを明言してください。」
と聖者プンナカ。

一〇四六「プンナカよ、
彼らは望み、称揚し、
骨を折って、生けにえとして捧げ、
利得を条件として、愛欲に骨を折る。
彼ら施しを求められたら喜んで応じる者たちは、
生存愛著に染められた者たちであり、

出生と老いを渡っていない、
と、わたしは明言する。」
と世尊。

一〇四七「尊い人よ、
たとえ彼らが種々の犠牲祭によって、
施しを求められたら喜んで応じても、
出生と老いとを渡れなかったとすると、
それならそれで、
愛欲神や人々の世界において、
だれが出生と老いとを渡るのですか。
世尊よ、
わたしはそれを質問いたします。
わたしにそれを明言してください。」

と聖者プンナカ。

一〇四八「プンナカよ、
世界において、あらゆる種類のものを推定し、
世界のどこにおいても、
心が乱れたことがあることはなく、
安穏で、熱情がなく、錯乱がなく、
思い焦がれのない者は、
出生と老いを渡った、
と、わたしは明言する。」
と世尊。

五　メッタグー青年男子の質問

一〇四九「世尊よ、

わたしはそれを質問いたします。
わたしにそれを明言してください。
あなたは祭司の聖典に完全に到達し、
自ら修習した人だと思います。
世界において、
多くのいろいろな形態のこれらの苦しみは、
何でもかんでも、
どこから起こったのでしょうか。」
と聖者メッタグー。

一〇五〇「メッタグーよ、
偽りなく、
あなたは苦しみの根源をわたしに質問した。
わたしが認識し理解していることにしたがって、

それをあなたに教え示そう。
世界において、
多くのいろいろな形態のこれらの苦しみは、
何でもかんでも、
愛取を発端とした結果として生じる。

一〇五一　偽りなく、知り得ていず、愛取をなす者は、
怠け、何度も苦しみに堕ちる。
全くこの理由ゆえに、
わかっている者は愛取をなさず、
苦しみへの生の根源を観察するのである。」
と世尊。

一〇五二「ちょうど質問したことについて、
わたしたちに告知してくださいました。

わたしは他のことをあなたに質問いたしますので、
どうぞ、それについても明言してください。
そのときどのように、
揺るぎない者たちは、
氾濫（はんらん）、出生と老い、
そして、不運な出来事と悲嘆を、
切り抜けられるのでしょうか。
神賢よ、
どうか、わたしにそれを明らかにしてください。
全く同様に、あなたはこの法則をご存じです。」

一〇五三「メッタグーよ、
風評に基づかず、
この世界においての法則をあなたに告知しよう。

それを知り、記憶修習し、実行しながら、
世界における固執を渡りなさい。」
と世尊。

一〇五四「偉大な尊い人よ、
そして、その最も偉大な法則に、
わたしは喜びを見いだします。
それを知り、記憶修習し、実行しながら、
世界における固執を渡ります。」

一〇五五「メッタグーよ、
上に、下に、横に、そして真ん中でも、
あなたが正智することは何でも、
これらにおいて、
喜悦と居所（いどころ）と識別を払いのけ、

生存において、
とどまらないようにしなさい。

一〇五六　このように時を過ごし、記憶修習し、
怠惰でなく実行している向煩悩滅尽多学男は、
種々の愛着で結びついているものと、
出生と老いと不運な出来事と悲嘆を捨て、
まさにこの世で知り得た者は、
苦しみを捨断するだろう。」
と世尊。

一〇五七「ゴータマ（牛王）よ、
この偉大な尊い人の言葉に、
わたしは喜びを見いだします。
愛取のないことが正しく告知されました。

というのは、世尊は確実に苦しみを捨断し、
全く同様に、あなたはこの法則をご存じだからです。

一〇五八　神賢よ、
そして同一に、
あなたが義務を負って忠告するならば、
きっと苦しみを捨断するでしょう。
龍よ、
わたしはそれぞれに合一して帰依いたします。
たぶん、世尊はわたしに、
義務を負って忠告してくださるでしょう。」

一〇五九「祭司であり、
祭司の聖典に完全に到達し、
道徳的汚点がなく、

愛欲による生存において、
愛着のきずなで結びついていないと、
あなたが証智することができる人は、
全く確実にこの氾濫を渡り、
そして、妨害がなく、不信がなく、
かの岸へ渡った人である。
一〇六〇　そして、この世で彼は、
知り得た者であり、
祭司の聖典に完全に到達した、
ひとかどの人であり、
生存非生存において、
この愛着をもって離れないものを解放する。
彼は渇愛を離れ、

錯乱がなく、思い焦がれがなく、
彼は出生と老いを渡る、
と、わたしは明言する」と。

六　ドータカ青年男子の質問

一〇六二「世尊よ、
わたしはそれを質問いたします。
わたしにそれを明言してください。
偉大な尊い人よ、
わたしはあなたの言葉を要望します。
あなたの大声でお話しになることを聞いて、
自己の煩悩破壊を学びたいのです。」
と聖者ドータカ。

一〇六二「ドータカよ、
それでは、熱心に行ないなさい。
まさにここに智慧ある博識な者は記憶修習し、
大声で話すことを聞き、
ここから自己の煩悩破壊を学びなさい。」
と世尊。

一〇六三「愛欲神や人々の世界において、
道徳的汚点がなく進展している祭司を、
わたしは見ています。
すべてを見通すお方よ、
わたしはそれぞれに帰依いたします。
サキャ族のお方よ、
種々のどのようにと問うことから、

わたしを救済してください。」

一〇六四「ドータカよ、
世間において、
どのようにと問う者のだれをも、
わたしは救済に臨ませることはないだろう。
そして、最上の法則を認識することによって、
そのように、あなたは、
この氾濫を渡ることができるだろう。」

一〇六五「神聖な人よ、
哀れんで、わたしが識別すべき、
遠離（おんり）の法則を諭してください。
空（くう）としてわたしが害されないように、
この世でまさに安穏として、

染みつかされることなく実行します。」

一〇六六「ドータカよ、
風評に基づかず、
この世界においての安穏をあなたに告知しよう。
それを知り、記憶修習し、実行しながら、
世界における固執を渡りなさい。」
と世尊。

一〇六七「偉大な尊い人よ、
そして、その最も偉大な安穏に、
わたしは喜びを見いだします。
それを知り、記憶修習し、実行しながら、
世界における固執を渡ります。」

一〇六八「ドータカよ、

上に、下に、横に、そして真ん中でも、
あなたが正智することは何でも、
これを世界において、
『愛着をもって離れないものだ』と知り、
生存非生存に対して、
渇愛をなしてはならない。」
と世尊。

七　ウパシーヴァ青年男子の質問

一〇六九「サキャ族のお方よ、
わたし一人では、
大きな氾濫を渡ることに、目印がなく、
全く立ち向かうことができません。

すべてを見通すお方よ、
それを目印として、この氾濫を渡れるような、
対象の固定を明言してください。」
と聖者ウパシーヴァ。

一〇七〇「ウパシーヴァよ、
無所有の状態を凝視しながら、
記憶修習を持って、
『あることはない』、このようなことによって、
あなたは氾濫を渡りなさい。
種々の感覚の喜びの対象を捨断し、
講演にしたがってやめ、
渇愛を破壊し、
夜も昼も努めていなさい。」

と世尊。

一〇七一「すべての感覚の喜びの対象において愛著を離れ、
無所有の状態を目印として、他のものを捨て、
最も優れた認知離解脱において離解脱した者は、
そこで悪にけがされずに、
とどまることができるでしょうか。」

と聖者ウパシーヴァ。

一〇七二「ウパシーヴァよ、
すべての感覚の喜びの対象において愛著を離れ、
無所有の状態を目印として、他のものを捨て、
最も優れた認知離解脱において離解脱した者は、
そこで悪にけがされずに、
とどまることができる。」

と世尊。

一〇七三「すべてを見通すお方よ、
彼がそこで悪にけがされずに、
たくさんの雨期の間、同様にとどまるならば、
そこでまさに、離解脱した彼は、
心が醒めるのでしょうか。
そのような識別は存在するのでしょうか。」

一〇七四「ウパシーヴァよ、
風の素早い動作で投げ飛ばされたプラズマが、
消失し行ってしまい、数えられなくなるように、
このように神賢は、
心の要素と身体から離解脱して、
消失し行ってしまい、数えられなくなる。」

と世尊。

一〇七五「その消失して行った人か、
それともあるいは、
彼はあることがないのでしょうか。
それとも偽りなく、
不滅で異常がないのでしょうか。
神賢よ、
どうか、わたしにそれを明らかにしてください。
全く同様に、あなたはこの法則をご存じです。」

一〇七六「ウパシーヴァよ、
消失して行った人に、
大きさがあることはない。
それによって彼を断言するものが、

彼にあることはない。
すべての法則が根こそぎにされたとき、
すべての言い方の道も根こそぎにされるのだ。」
と世尊。

八　ナンダ青年男子の質問

一〇七七「世界において、
神賢たちがいらっしゃると、
人々は断言しますが、
ではまさにそれは、
どのようにでしょうか。
精通が起因した人を、
実は神賢と断言するのでしょうか。

それとも偽りなく、
生活によって生じた人でしょうか。」
と聖者ナンダ。

一〇七八「ナンダよ、
実感したことによってではなく、
教学によってではなく、
精通によってではなく、
ここに善の人たちが、神賢とは、
疑惑と敵意を解き、
錯乱がなく、思い焦がれがなく、
実行すると断言する彼らを、
わたしは神賢たちと明言する。」

一〇七九「世尊よ、

これらの出家修行者である祭司たちで、
実感したことに関して、
同一に、教学によって清潔を断言し、
同一に、戒律で清潔を断言し、
多くの形状-容姿をもって、
清潔を断言するどんな人でも、
では果たして彼らがそこで実行するとおりに、
出生と老いとを渡ったのでしょうか。
尊い人よ、
わたしはそれを質問します。
世尊よ、
わたしにそれを明言してください。」
と聖者ナンダ。

一〇八〇「ナンダよ、
これらの出家修行者である祭司たちで、
実感したことに関して、
同一に、教学によって清潔を断言し、
同一に、戒誓で清潔を断言し、
多くの形状-容姿をもって、
清潔を断言するどんな人でも、
いかに彼らがそのとおり実行しても、
彼らは出生と老いを渡っていない、
と、わたしは明言する。」
と世尊。
一〇八一「世尊よ、
これらの出家修行者である祭司たちで、

実感したことに関して、
同一に、教学によって清潔を断言し、
同一に、戒誓で清潔を断言し、
多くの形状-容姿をもって、
清潔を断言するどんな人でも、
もし神賢が、彼らは氾濫を渡っていない、
と明言するのならば、
それならそれで、
愛欲神や人々の世界において、
だれが出生と老いとを渡ったのでしょうか。
尊い人よ、
わたしはそれを質問します。
世尊よ、

わたしにそれを明言してください。」
と聖者ナンダ。

一〇八二「ナンダよ、
わたしは、
『すべての出家修行者である祭司たちが、
出生と老いに包囲されている。』
と明言するのではない。
自分が所有する、
ここに実感したこと、
あるいは教学、
あるいは考えたこと、
あるいは戒誓もすべて捨断し、
多くの形状-容姿もすべて捨断し、

渇愛を理解し、無漏である人たち、
偽りなく彼らが、
『氾濫を渡ったひとかどの人たち』である、
と、わたしは明言する。」
と世尊。

一〇八三「ゴータマよ、
この偉大なる尊い人の言葉に、
わたしは喜びを見いだします。
愛取のないことが正しく告知されました。
自分が所有する、
ここに実感したこと、
あるいは教学、
あるいは考えたこと、

あるいは戒誓もすべて捨断し、
多くの形状・容姿もすべて捨断し、
渇愛を理解し、無漏である人たち、
彼らが『氾濫を渡った人たち』である、
と、わたしは同様に明言します」と。

九　ヘーマカ青年男子の質問

一〇八四「ゴータマの救済計画より前、
『このようであった、
このようになるだろう。』
と、これらの人々が以前に明らかにしたこと、
それはすべて某々しかじかであり、
それはすべて間違った見解の増大でした。

一〇八五　神賢よ、
わたしはそこで楽しみを、
見いだしませんでした。
そして、あなたはわたしに、
渇愛の根絶の法則を言明なさいました。
それを知り、記憶修習し、実行しながら、
世界における固執を渡ります。」
と聖者ヘーマカ。

一〇八六「ヘーマカよ、
ここに実感された聴聞された考えられた識別された、
種々の喜びにおいて、
衝動愛著の切除である、
不消（ふしょう）の煩悩破壊の手段がある。

一〇八七　これを認識し、記憶修習し、
この世界で完全覚醒し、
そして、いつも寂静に臨んだ人たち、
彼らは世界における、
固執を渡ったのである」と。

一〇　トーデッヤ青年男子の質問

一〇八八「種々の感覚の喜びの対象が住むことなく、
渇愛が存在せず、
そして、どのようにと問うことを渡った人、
彼の離解脱はどのようなものですか。」
と聖者トーデッヤ。

一〇八九「トーデッヤよ、

種々の感覚の喜びの対象が住むことなく、
渇愛が存在せず、
そして、どのようにと問うことを渡った人、
彼の離解脱は別ではない。」
と世尊。

一〇九〇「サキャ族のお方よ、
彼は要素の蓄積の影響を受けないのでしょうか。
それとも、望みがあるのでしょうか。
彼は著しく精通を有する者なのでしょうか。
それとも、智慧を有することを、
得ようとしているのでしょうか。
すべてを見通すお方よ、
それだから、わたしは神賢を識別したいのです。

わたしにそれを数え上げてください。」

一〇九一「トーデッヤよ、
彼は要素の蓄積の影響を受けず、
そして、彼は望みがあることはない。
彼は著しく精通を有する者であり、
智慧を有することを、
得ようとしているのではない。
このように同様に、神賢を識別しなさい。
道徳的汚点がなく、
愛欲による生存において、
愛着のきずなで結びついていない」と。

一一　カッパ青年男子の質問

一〇九二「尊い人よ、
大きい恐怖ある氾濫が生じ、
湖に似たものの真ん中でとどまっている、
老いによる死の神に打ちひしがれた人たちの、
陸を語ってください。
そして、引き続いて、
これがあることがないように、
あなたはわたしに陸を言明してください。」
と聖者カッパ。

一〇九三「カッパよ、
大きい恐怖ある氾濫が生じ、
湖に似たものの真ん中でとどまっている、

老いによる死の神に打ちひしがれた人たちの、
陸をあなたに語ろう。

一〇九四　カッパよ、
道徳的汚点がなく、
愛執がないこと、
これが陸に別のものではなく、
老いによる死の神の完全な破壊である、
煩悩破壊である、
と、わたしはそれを明言する。

一〇九五　これを認識し、記憶修習し、
この世界で完全覚醒した人たち、
彼らは欲望満足で破滅天（はめってん）の後に続くことはなく、
彼らは破滅天に喜んで仕えることはない。」

と世尊。

一二　ジャトゥカンニン青年男子の質問

一〇九六「共に眼から生じる者よ、
感覚の喜びの対象を懸命に試みることのない、
勇者のことを聞き、
氾濫を圧倒している人に、
感覚の喜びの対象のないことを質問するために、
わたしはこちらに来ました。
安穏の手段を明言してください。
世尊よ、
真理にしたがって、
わたしにそれを明言してください。

一〇九七　というのは、
あたかも燃え盛る太陽が、
大地を火によって征服するように、
世尊は種々の感覚の喜びの対象を、
征服して活躍なさるからです。
広大な智慧を有する方よ、
わたしが識別すべき、
ここに出生と老いの中断となる法則を、
かすかな智慧を有する、
わたしに明かしてください。」
と聖者ジャトゥカンニンよ。

一〇九八「ジャトゥカンニンよ、
種々の感覚の喜びの対象において、

意地汚い欲望を除去しなさい。
解放を安らぎと見て、
道徳的汚点である、
獲得されたものや真我でないものを、
あなたに存在させてはならない。

一〇九九　以前のものは枯らしなさい。
後に道徳的汚点を、
あなたに存在させてはならない。
存在の現存状態でとらわれないならば、
あなたは寂静に臨んで、
動き回って生活するだろう。

一一〇〇　祭司よ、
心の要素-形状-容姿において、

意地汚い欲望をすっかり離れた人、
彼には、それによって死の神の力が働く、
種々の漏は存在しない。」
と世尊。

一三　バドラーヴダ青年男子の質問

一〇一「住宅を捨てて、渇愛を断ち切り、
欲望や性欲がなく、喜悦を捨てて、
氾濫を渡り、離解脱し、
期間を捨てている、
大変頭の良い方に問います。
龍にお聞きした後に、
ここから離れていくつもりです。

一一〇一　勇者よ、
あなたの話題を要望しながら、
様々な人々が種々の地方から会合しています。
どうか、あなたは彼らに明らかにしてください。
全く同様に、
あなたはこの法則を知っているからです。」
と聖者バドラーヴダ。

一一〇二「バドラーヴダよ、
渇愛を持つことをすべて除去しなさい。
というのは、上に、下に、横に、
そして同一に、真ん中という世界において、
とらわれるどんなものでも、
まさにそれによって破滅天は、

生命あるものに取り入るからである。

二〇四　この理由ゆえに、
認識し理解しながら、
とらわれないようにしなさい。
この死の神の領域にしっかりつかまれた弟子は、
『（破滅天に）帰属の生命体たち』であると凝視しながら、
向煩悩滅尽多学男は、
すべての世界において、
道徳的汚点を記憶修習する。」
と世尊。

一四　ウダヤ青年男子の質問

二〇五「静慮し、塵を離れ、座り、

なされるべきことをなし、
無漏であり、
かの岸に完全に到達した人に、
すべての法則についての探求のために現われ、
こちらに来ました。
非神秘力を細分することである認識離解脱を、
語ってください。」
と聖者ウダヤ。

二〇六「ウダヤよ、
種々の愛欲の衝動と、
種々の落胆との両方の捨断を、
そして、頑固の排除、種々の後悔の防止を、

二〇七　無頓着と記憶修習による罪のないこととを、

先に起こった正しい論法を、
非神秘力を細分することである認識離解脱、
と、わたしは語る。」
と世尊。

二〇八「では何が世界へのきずなでしょうか。
では何がその吟味でしょうか。
その何の中断によって、
煩悩破壊といわれるのでしょうか。」

二〇九「喜悦が世界へのきずなであり、
熟考がその吟味であり、
渇愛の中断によって、
煩悩破壊といわれる。」

二一〇「どのように、

記憶修習し、実行すると、
種々の識別は打破されるのでしょうか。
世尊に質問するために、
わたしたちはこちらに来ました。
あなたのその言葉をお聞きしたいのです。」

二二「心の中と外側との感覚に喜びを見いださず、
そのように記憶修習し、実行すると、
種々の識別は打破される」と。

一五　ポーサーラ青年男子の質問

二三「過去を告白し、
欲望や性欲がなく、
不確かさを断ち切った人、

かの岸に完全に到達した人に、
すべての法則についての探求のために現われ、
こちらに来ました。

一一三

サキャ族のお方よ、
離生存した形状-容姿の認知を持ち、
すべての身体を捨断し、
心の中と外側とに、
『何もあることはない。』
と見る人の精通を、
わたしはお尋ねします。
どのようにそのような人は、
導かれ得るのでしょうか。」
と聖者ポーサーラ。

二二四「ポーサーラよ、
すべての識別の継続を証智しながら、
真理勝者はこれのある状態、
離解脱した、それの最終地点をわかっている。
二二五　無所有の状態の起源をわかっており、
『喜悦がきずなである。』
と、まさにこのように証智し、
これから、そこで正観する。
その完成した祭司には、
この精通、真理がある。」
と世尊。

一六　モーガラージャン青年男子の質問

二二六「わたしは二回サキャ族の方に、
質問しましたが、
わたしに眼ある人は、
回答なさいませんでした。
『そして三度目に、
愛欲神のような尊い人は回答なさる。』
と、わたしは聞きました。

二二七　この世界、高い世界、
愛欲神と共にある神聖天の世界、
彼らは名声あるゴータマの見解を、
証智していません。

二二八　このように素晴らしい洞察に満ちた人に、

探求のために現われ、こちらに来ました。
世界をどのように、
じっと見つめる人に、
死の神の王は訪れないのでしょうか。」
と聖者モーガラージャン。

二二九「モーガラージャンよ、
いつも記憶修習し、
自己の謬見(びゅうけん)を後で抜き捨て、
世界を空(くう)とじっと見つめなさい。
このように死の神を渡ることができる。
世界をこのように、
じっと見つめる人に、
死の神の王は訪れない」と。

一七　ピンギヤ青年男子の質問

一二〇「わたしは老いて、
力がなく、賛美から離れ、
目は清潔ではなく、
聞くことは快適ではありません。
わたしが気絶して、
中途で滅びないように願います。
わたしが識別すべき、
ここに出生と老いの中断となる法則を、
明かしてください。」
と聖者ピンギヤ。

一二一「ピンギヤよ、
種々の形状-容姿において、

悩まされているのを見ても、
種々の形状-容姿において、
怠惰な人々は苦しめられる。
ピンギヤよ、
この理由ゆえに、
あなたは怠惰でなく、
再び生存することがないように、
形状-容姿を捨てなさい。」
と世尊。

二三「四つの方角、
四つの東西南北の中間位、
上に、下に、この十の方角、
世界において、

あなたに見られず、
あるいは、聞かれず、考えられず、
および、識別されない、
道徳的汚点はありません。
わたしが識別すべき、
ここに出生と老いの中断となる法則を、
明かしてください。」

一二三「ピンギヤよ、
渇愛のとりこになり、
焼けるような熱さが生じ、
老いに打ちひしがれた適任の人々を、
凝視することによって、
ピンギヤよ、

この理由ゆえに、
あなたは怠惰でなく、
再び生存することがないように、
渇愛を捨てなさい。」
と世尊。

一八

これを世尊は、マガダ国のパーサーナカ神殿にとどまっているときに演説なさった。十六人の参拝者の祭司に願い求められ、質問されるごとに、種々の探求を明らかになさった。同様に、それぞれの探求の意義を認識し、法則を認識し、真理の法則にのっとり法則の実践を行なうならば、まさに老死に対してかの岸に至るであろう。これらの法則はかの岸に至ることができると、この理由ゆえに、これらの法則の要点には、『最高の要点（かの岸への軌道）』と、まさに象徴物がある。

二二四　アジタ、ティッサメッテッヤ、プンナカ、
それで、メッタグー、
ドータカ、ウパシーヴァと、ナンダと、
それで、ヘーマカ、
二二五　トーデッヤ、カッパの両者、
そして、賢者ジャトゥカンニン、
バドラーヴダ、ウダヤと、
そして、祭司ポーサーラも、
頭の良いモーガラージャンと、
偉大な尊い人ピンギヤと。
二二六　この人たちは、
振る舞いの目的を達成した、
尊い人であられる覚者に到来し、

種々の成就した探求を質問して、
最上の覚者に到来した。

一二七　彼らに種々の探求を質問されて、
覚者は真理にしたがって回答なさった。
種々の探求の回答で、
神賢は祭司たちを喜ばせた。

一二八　太陽の血族であり、
眼(め)ある覚者によって、
喜ばせられた彼らは、
最高の智慧を有する者の面前で、
神聖行を実行した。

一二九　それぞれの探求に対して、
覚者によって指し示されたとおりに、

同様に従うことができる者は、
この岸からかの岸に至ることができるのである。

一三〇　最も偉大な道を修習している者は、
この岸からかの岸に至ることができ、
それは、かの岸に至るための道であり、
この理由ゆえに、
『最高の要点（かの岸への軌道）』と。

一三一「『最高の要点』を朗唱しよう。
垢（あか）を離れた広大で頭の良い方は、
見たとおりに、同様に言明なさいました。
感覚の喜びの対象がなく、
野望がない救世主が、

どうして嘘をつくでしょうか。

一三三　垢と迷妄が捨断され、
慢と偽善を捨断した方に、
賛美に伴われた話し方を、
さあ、わたしは告知しよう。

一三四　神聖な人よ、
闇を払う方、覚者、
すべてを見通すお方、
世界の終極に完全に到達した方、
すべての生存を乗り越えた方、
無漏の方、
すべての苦しみを捨断した方、
真理を呼び寄せた方に、

わたしは服従したのです。

一三四　鳥が低木の茂みを捨断して、
数多くの実の森に住むように、
このように、わたしも、
知識や智慧をほとんど持っていない者たちを捨断して、
あたかも白鳥のように、
壮大な海に迫ってきたのです。

一三五　ゴータマの救済計画より前、
『このようであった、
このようになるだろう。』
と、これらの人々が以前に明らかにしたこと、
それはすべて某々しかじかであり、
それはすべて間違った見解の増大でした。

一三六　一人の闇を払う方が座っておられ、
彼は出生が良く光をもたらす方です。
ゴータマは広大な著しい精通の方であり、
ゴータマは広大で頭の良い方です。

一三七　わたしに現実に利益をもたらし、
直接的であり、
渇愛の破壊、息災の法則を指し示された方には、
およそたとえ話があることはないのです。」
と聖者ピンギヤ。

一三八「ピンギヤよ、
今では、瞬く間も、
彼から（信と喜と意識と記憶修習が）離れているのか。
広大で著しい精通の方であるゴータマから、

広大で頭の良いゴータマから。

一三九　あなたに現実に利益をもたらし、
直接的であり、
渇愛の破壊、息災の法則を指し示された方には、
およそたとえ話があることはないのである。」

一四〇「祭司よ、
今では、瞬く間でも、
彼から（信と喜と意識と記憶修習が）離れていません。
広大で著しい精通の方であるゴータマから、
広大で頭の良いゴータマから。

一四一　わたしに現実に利益をもたらし、
直接的であり、
渇愛の破壊、息災の法則を指し示された方には、

およそたとえ話があることはないのです。

一二四一　祭司よ、怠惰でなく、昼夜、
あたかも意識の目によって、
彼を確かめるように、
帰依しながら夜を過ごします。
まさにそれによって、
（信と喜と意識と記憶修習が）離れないことを考えるのです。

一二四二　わたしの信と喜と意識と記憶修習は、
ゴータマの救済計画から離れ去らないのです。
広大な智慧を有する方が、
進路を向けるどんな方角でも、
まさにそれによって、
このわたしは傾けられるのです。

二四四　力弱い老いたわたしの身は、
まさにそれによって、
そこを立ち去りません。
思惟したことのために、
常に進路を向けるのです。
祭司よ、
というのは、わたしの意識は、
彼により、適しているのです。
二四五　ぬかるみの中に横たわって、
振動させながら、
大陸から大陸へ泳いで渡り、
それで、氾濫を渡った、
無漏の正覚者にお会いしたのです。」

二四六「ヴァッカリ（樹皮の衣を着る者）、
バドラーヴダ、
そして、アーラヴィ・ゴータマ（森林に居住している牛王）が、
信仰に没頭したように、
このように、まさにあなたは同様に、
信を公示しなさい。
ピンギヤよ、
あなたは死の神の領域のかの岸に至るだろう。」

二四七「神賢の言葉を聞いて、
このわたしはさらに多く浄信を持ちます。
正覚者はベールが取り去られ、
妨害がなく、会得があるのです。

二四八　愛欲神を超えるものたちを証智し、

あらゆる種類のものすべてを、
経験なさった尊師は、
不信を有すると公言している人たちの、
種々の探求の救済者です。

二四九　打ち勝ち難く、揺るがない、
たとえ話があることはないものに、
およそ確実に行くでしょう。
ここでわたしの不信はありません。
このように、わたしの没頭した思念を、
記憶実践してください」と。

［経節（スッタ・ニパータ）五　最高の要点品（パーラーヤナ・ヴァッガ）］

二、骨子の詩句

◉愛欲本質神との対話

バーヴァリ（水元素の多量の流れ）は、
その彼を見て、
座に招き、楽と善を質問し、
この発言を明言した。
「実にわたしに法則によって贈与されたものは、
すべてわたしにより解放した。
神聖な人よ、わたしを許可しなさい。
わたしに五百金があることはない。」
「もし、懇願しているわたしに、
尊者が贈り物として与えないのならば、

七日目にあなたの頭は、
七つの断片に破裂するぞ。」
支度して、そのペてん師は、
忌まわしいことを告知した。
彼のその発言を聞いて、
バーヴァリは苦しんだ。
食物を取れずに、乾燥し、
不運な出来事によって不運に取りつかれた。
および同様に、このような心に対して意識は、
静慮において楽しまなくなった。
恐れ、苦しんでいるのを見て、
美徳を懸命に試みる者である愛欲本質神は、
バーヴァリに至り、
この発言を明言した。

「彼は頭を認識せず理解していない。
彼はぺてん師で財産を欲しがっている。
頭や頭が割れることについての精通は、
彼には存在しない。」
「それなら、尊者がわかるなら、
質問されて、
その頭と頭のあちこちが割れることを、
わたしに言明してください。
あなたのその言葉を聞きたいのです。」

現代のインドにおいてもそうだが、この時代の外道の修行者においても、ある程度真剣に修行を行なっている者は、やはり愛欲本質神との対話ができたようである。

しかし、彼バーヴァリは、生命に対する愛着がまだ存在しているがゆえに、ペ

てん師の祭司の言葉で強く心を乱している。なんと哀れな状態であろうか。

◉愛欲本質神の世界におけるサキャ神賢の認識

「それならそれで、この大地の円全体において、
だれが頭と頭のあちこちが割れることがわかるのか。
それをわたしに言明してください、
愛欲本質神よ。」

「カピラヴァットゥ（褐色の要素）の都市から出た、
世界の首長、
オッカーカ（たいまつのような）国王の子孫、
サキャ（まぶしく有能な他のために尽くす者）族の息子、
光をもたらす者。
祭司よ、全く彼は正覚者であり、
すべての法則に対して、かの岸に完全に到達し、

すべての証智の能力を勝ち取り、
すべての法則において眼ある人であり、
すべてを破壊する法則に達し、
愛取の撲滅において離解脱している。
彼は覚者であり、
世尊であり、
眼ある人であり、
世界において法則を指し示す。
あなたは彼に至り、質問しなさい。
彼はあなたにそれを明らかにするだろう。」

この当時、愛欲本質神の世界では、サキャ神賢こそ最高の智慧者であり、最高の教師であり、そして全智・全能であることが理解されていたようである。すなわち、智慧においては、一般的な神々、あるいは天の人々と比較すると、サキャ

神賢の智慧は比類なきものであることをこの経典は示している。

◉『パーラーヤナ』の三つのポイント

「それでは、祭司よ、会ったとき、
どのように『覚者だ』と判断するのですか。
わたしたちがそれを判断できるように、
判断できないわたしたちに語ってください。」
「全く、種々の聖典において、
偉大なる男性の種々の顕著な特徴が、
公表されており、
そして、段階的に全部で、
三十二数え上げられている。
全身に偉大なる男性の、
種々の顕著な特徴がある者の方向は、

二つだけであり、
全く第三は存在しない。
もし家で生活するならば、
この大地に勝利し、
暴力を用いず、兵器を用いず、
法則によって諭す。
そして、もし彼が家庭生活の快適さを捨て、
家なき状態になり、禁欲生活を送るならば、
ベールが取り去られた、
正覚者、供養値魂、無上士となる。
わたしの出生、家系、
そして、顕著な特徴について、
種々の聖典や教え子たちについて、
次にまた、

頭と頭のあちこちが割れることについて、
君たちは意識だけによって質問しなさい。
遮蔽がなく見る覚者という条件では、
意識によって質問した種々の探求に対して、
言葉によって解放するだろう。」

ここで、『パーラーヤナ』の内容において、重要なポイントが三つ説かれている。その第一は、真理勝者の三十二の顕著な特徴（三十二相）のことである。第二は、在家の場合、聖なる転輪王となり、出家の場合、十の能力者となることである。そして第三は、意識による質問、それを言葉により解放する、つまり、テレパシーを有していることである。

ところで、この真理勝者の三十二の顕著な特徴、あるいは、在家における聖なる転輪王と出家における十の能力者、——この二つについては、原始仏典の教えにはないという考え方もあるので、検討を要する必要があると思われる。

なお、バーヴァリがサキャ神賢のもとに弟子を行かせたのは、彼が年齢的に、ものすごく年をとっているからである。なぜなら、これだけ弟子がいるということは、相当の年だと見るべきだからである。弟子たちの修行が結構進んでいるということからも、バーヴァリが年をとっていたことがわかるのである。

◉テレパシーによる救済

ところで、このテレパシーの能力だが、わたしの例を三つほど挙げることにしよう。

・タイミングのよい尊師の説法　聖者アヌーパマ到達光正師

尊師がアストラル世界・コーザル世界を通じて弟子とつながっていて、一人一人の心の状態を理解されているんだなと感じたのは、出家して間もないころでした。

それは、自分が行なっているワークでの問題点、修行で知りたいこと、教義上の疑問などをいろいろと考えていると、タイミングよく尊師の説法があり、それは不思議と自分の抱えている問題点・疑問点を解決するものでした。しかも、それは一度や二度ではなく、何度もありました。

例を挙げると、「現代では、カルマの法則を実感するのが難しいのはなぜだろう?」と考えていたら、「人の心が外側に向き、少しずつ少しずつ心が物質化してゆき、カルマの現象化が遅れている」という内容の説法があったり、「なぜ蓮華座を組む必要があるのだろうか」と思っていると、それについての的確な説法があったり、一時期否定的になって「このワークは意味があるのだろうか?」と思っていると、ワークの意味合い、その必要性についての説法があり、目が覚める思いをしたりと、枚挙にいとまがありません。

このような体験を通して、尊師が弟子の一人一人をいかに的確に見ているかということを強く感じることができました。

そして、わたしの心の迷妄は少しずつ晴れていき、真理に対する確信が生じてきました。グルの偉大さ、素晴らしさを、今でも説法を聴く度に感じています。

・尊師はいつも弟子を見ている　聖者ウッジャヤ到達光師

わたしが忍辱精進修行（立位礼拝を一日十六時間行なう修行）に入っていたときのことです。

この修行を行なっていると、様々な肉体的苦痛にさいなまれました。例えば、胸に激痛が走って声が出せなくなったり、膝に激痛が走り立っていられなくなったりしたのです。これらは、すべて修行によるカルマの解放だったのですが、そのときは、「こんなことが続いたら、どうかなってしまうんじゃないか。ひょっとしたら、膝の靭帯が切れて歩けなくなってしまうんじゃないか」などの不安な気持ちが生じ、立位礼拝の修行ができなくなってしまったのです。

「続けるのは苦しい、このまま修行をやめてしまおうか」と、心の中で葛藤していたその日の夜に、尊師のご説法がありました。そして、尊師はそのご説法の中でわたしの状態を取り上げられたのです。なぜわたしの心がそのようになったのか、そして、どのようにすれば今の状態が改善されるのかを、本当にタイミングよく指摘されたのでした。このわたしの状態は、だれにも相談したことがなかったのに、尊師はわたしの心の状態を神秘的な力によって見通されたのです。それまで、話には聞いていたことですが、尊師はいつも弟子の状態を見

ていらっしゃるんだなと実感しました。

わたしたちが修行を進めていくにあたって、様々な肉体的変化、精神的変化が生じたとき、わたしたち自身は全く無力だと思います。しかし、この経験を経て、やはりグルこそすべてであると確信しました。

・自分以上に自分をわかってくださる尊師　村山太良介

それは、九一年の十二月の末のことでした。

その当時、わたしは生活の中で自己のけがれというものを感じつつも、オウム真理教の活動を続けていました。そこで、道場の祭壇の前でこう発願したのです。

「シヴァ大神！　麻原尊師！　わたしはけがれています。どうかこのけがれを落とし、苦を証智できるよう、カルマ落としお願いします！」

そして数週間後、わたしの想像を超えた形で、次々とカルマは現象化し始めました。

毎日のように、思いがけないことで怒鳴られたり、つかみかかられたり、嘘をつかれて、約束をすっぽかされ続けたりしました。それらは、どれもこれもかつてのわたしが他の人に

してきたことばかりだったのです。

そんなとき、幼なじみの親しかった友人に滅多打ちにされるという出来事が起こったのです。

その友人は、薬の中毒で精神的に少しおかしくなっていて、精神病院に入れられていました。そして、精神病院に入れられた原因が、わたしにあると誤解していたのです。

わたしは病院へ運ばれました。これがカルマ落としだとわかっていたため、友人に対して怒りの感情は生じなかったのですが、わたしの中には異常なほどの空虚感が支配していました。

「あれほど俺を頼ってきたAが、たった三カ月であんなふうになってしまうなんて。友情って、人の心って何だろう。」

今まで、友人関係というものを人生の要としてきたわたしにとって、これほどショックなことはありませんでした。

「尊師、俺はこれからどうすればいいんですか。何を頼りに……。」

わたしは、心の中で尊師にそう尋ねていました。

そんなとき、東京と横浜で麻原尊師の説法会が開かれると知り、わたしはすがるような思いで新東京本部へ出かけました。そして、説法をされている尊師に心の中で、「どうすればいいんです!? 教えてください!」と問い続けていたのです。

説法が終わりオウムを三唱する前に、ふっと尊師がわたしの方に顔を向けられました。とても心配そうな表情でこちらを見ている……。

「……ん？　尊師が俺を見ている？　いや、尊師は目がお見えにならないから、こんな遠くにいる俺に気がつくはずがない……。」

数時間後に行なわれる横浜での説法会へも、わたしは尊師を追っていきました。そこでも気持ちは同じでした。ただ同じ問いを尊師に投げかけていたのです。そんな気持ちがピークに達したとき、尊師は説法の声を休められ、そのお顔は道場の一番後ろにいるわたしに向けられたのです。わたしは、尊師から送られてくる温かいヴァイブレーションを感じました。

そして、しばらくの沈黙の後、ニコッと微笑まれた尊師は、突然説法の内容を変えられたのです。

「実は、信徒の中で友人に殴られ、カルマ落としをされた者がいる。」

うれしくて涙が込み上げてきました。本当に、自分以上に自分をわかってくれる人がここにいる――それだけで、わたしはうれしかったのです。

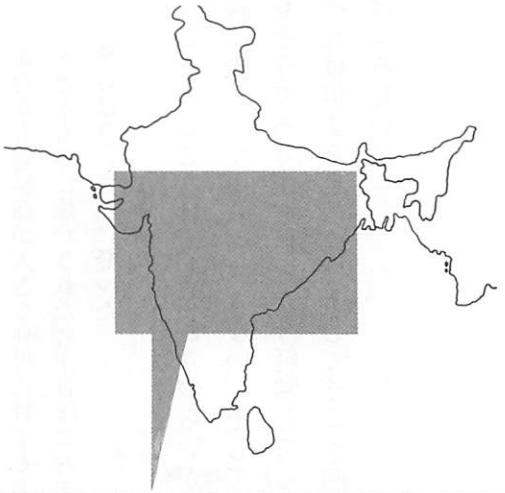
このとき、わたしがわざわざ横浜まで現われることを事前に知っていた者はだれ一人いませんでした。そして、わたしは身をすくめるようにして道場の後ろに座っていたのです。そ

れなのに、尊師はわたしのために法を説いてくださっているのです。
尊師は最後にこうおっしゃられました。
「今その信徒は、淡々と修行に励んでいるそうだ。」
わたしの尊師はすべてを知っていたのです。
サンサーラに存在するすべての魂が、この偉大なる真理、そして、この偉大なる尊師に巡り合えますように。

◉真理を求めて

バーヴァリに敬礼し、
そして、彼に対して右回りの礼をなし、
彼らすべては結ばれた髪、
そして、黒いカモシカの皮革を身につけ、
北へ向かって出発した。
アラカのパティッターナ（安住すること）へ、
東にあるマーヒッサティ（芳香土の大地）へ、

そのとき、ウッジェーニー（克服する妻の場所）へ、
そして、ゴーナッダ（縛りつけられた牛の場所）へ、
ヴェーディサ（空間の中間点に属している町）へ、
ヴァナサヴハヤ（命名された林）へも、
コーサンビー（優雅な最高の人）へ、
そして、サーケータ（欲求したものを与える町）へも、
そして、最も偉大な都市サーヴァッティへ、
セータヴィヤー（閉ざされた場所）へ、
カピラヴァットゥへ、
そして、クシナーラ（クサ草を備えた城塞）の官邸へ、
パーヴァー（警護して吹き飛ばす場所）へ、
そして、ボーガ（楽しみの場所）市へ、
ヴェーサーリー（広大王によって作られた都市）へ、
マガダ（太陽の祭司のいる）国の都市へ、
そして、気に入って心を喜ばせる、


セーダヴィヤー
サーヴァッティ
カピラヴァットゥ
コーサラ
クシナーラ
サーケータ
パーヴァー
ボーガ市
ヴェーサーリー
マガダ
コーサンビー
ラージャガハ
（パーサーナカ神殿）
ヴェーディサ
ゴーナッダ
ウッジェーニー
マーヒッサティ
ダッキナーパタ
パティッターナ
アッサカ
アラカ
ゴーダーヴァリー河

『パーラーヤナ』関連地図

パーサーナカ（石のような場所）の神殿へ。
あたかものどが渇いた者が冷たい水に対するように、
あたかも貿易商が大きな利得に対するように、
あたかも熱に焦がされた者が日陰に対するように、
彼らは急いで山に登った。

ここのところは大変わかりづらいが、これは彼らが出発してから後の経路を単純に表わしているにすぎない。そしてもともと、真理の探求者は、これはわたしもそうであるが、自分が今経験してる以上の真理の法則が存在するとするならば、それは何よりもの喜びとしてそこへ向かうのである。その表現箇所だと理解すればよろしい。

◉頭と頭のあちこちが割れること

「バーヴァリは、
頭と頭のあちこちが割れることを尋ねました。
世尊よ、それに回答してください。
尊い人よ、
わたしたちの不信を除去してください。」
「頭とは非神秘力と気づきなさい。
種々の信と記憶修習とサマディによって、
決意と精進によってつながった神秘力が、
頭のあちこちが割れる状態である。」

肉体における部所と霊的なものとの関係について、これから少し説明をしよう。わたしたちの真我そのものは心臓に宿り、そしてイメージ、これは頭に宿っている。したがって、頭が破壊される、イコール、アストラルの破壊であり、本質

的には解脱をしない限り、頭が崩壊することはないのである。したがって、その部分をサキャ神賢はお説きになったのである。

つまり、頭のあちこちが割れる状態とは、解脱、神秘力と結びつくのである。また一方、頭というのは非神秘力である。頭がアストラルであるということは、すでに非神秘力に至ってしまっているということを表わしている。

三、最高の要点

◉意識を固定する非神秘力

【質問】

では何により世界は包囲されていますか。では何により外に向かって輝きを発さないのですか。では何が汚染か明言してください。では何がそれに対する大きい恐怖ですか。

【回答】

非神秘力により世界は包囲されている。様々な欲求と怠惰より外に向かって輝きを発さない。愛著を感じる対象が汚染だとわたしは明言する。苦しみがそれに対する大きい恐怖である。

【解説】

まず、わたしたちを限定しているものは何か、それは非神秘力である。そして、それから光を遮るもの、それは様々な欲求と怠惰さである。そしてわたしたちをけがすもの、それは何であろうか。それは、愛著を感じる対象である。それによって何が起きるのか、それは苦しみであり、そしてその苦しみこそが、恐怖であると、ここでは説かれているのである。

もともと、わたしたちの意識は際限がない。そして、その際限のない意識を固定しているもの、それが非神秘力なのである。

したがって、煩悩破壊が進むにつれて、ちょうどそれは、水瓶(みずがめ)が海の中に浮遊していたとして、その水瓶が叩き割られたら、その中の水瓶の水が海の水と溶け込み、そして、その水瓶の水は、最終的には全体の海と一体となるのと同じように、わたしたちの世界を固定しているものは非神秘力であるということを、ここで表わしているのである。

◉〝流れ〟の防止と自制

【質問】

種々の流れはいたるところに流れます。種々の流れを何が防止し、種々の流れを自制するか明言してください。何によって種々の流れは弱められるのですか。

【回答】

世界における種々の流れは、記憶修習がそれらを防止し、種々の流れを自制するとわたしは明言する。智慧によってそれらは弱められる。

【解説】

ここでいう〝流れ〟とは、わたしたちの流転の方向を表わしている。その流転の方向、例えば地獄界や動物界や、あるいは低級霊域へと流転する、その流れを止めるもの、それは何であろうか。それは記憶修習であり、そして、それを弱め

るものは、それに対する鋭敏な智慧であるということを表わしているのである。

◉心の要素と形状・容姿の打破

【質問】

まさに智慧と記憶修習、そして、心の要素・形状・容姿について、これを質問されたので、わたしに語ってください。これはどこで打破されるのですか。

【回答】

この探求を質問したことについて、わたしはあなたに断言する。心の要素と形状・容姿とは全部打破される。識別の滅尽によって、ここでこれは打破される。

【解説】

これは大変重要な要素である。つまり、わたしたちを構成しているもの、それ

は、この粗雑な肉体・感覚・表象・経験の構成・識別という五つのとらわれの集積（詳細は『タターガタ・アビダンマ 第二誦品』一三四ページ参照）があるが、わたしたちが識別を完全に超越しない限り、わたしたちのすべての要素は破壊されない。つまり、わたしたちが生死を繰り返すということを、真理勝者であられるサキャ神賢は説いていらっしゃるのである。

◉三つの要素の打破と進展

【質問】

この世には、種々の推定された法則がある者たちと、種々の有学、種々の独断がある者たちがいますが、それらの進展を質問いたします。

【回答】

種々の感覚の喜びの対象に対して、熱望せず、意識を平穏にし、向煩悩滅尽多

学男はすべての法則における善を記憶修習し、托鉢修行者として歩き回りなさい。

【解説】

ここでは、まだ解脱をしてない者たちに、三つの要素があると説かれているのである。

その第一は、種々の法則が存在している。この「種々の法則が存在している」とは、まだある観念の枠組みの修行を行なっていることを表わしている。

第二は、種々の有学である。学問が必要であるということは、まだその全体の真相を、ありのままに自己の光によって理解し得ないことを表わしている。

そして、第三の種々の独断とは、偏った見解に立っていることを表わしている。

これらの三つの要素が打破されて、初めて解脱が訪れるのである。そして、解脱に至るためには、「種々の感覚の喜びの対象に対して、熱望せず、意識を平穏にし、向煩悩滅尽多学男はすべての法則における善を記憶修習し、托鉢修行者と

して歩き回りなさい」とおっしゃっているのである。

ところで、わたしたちが経験をなし、それを喜びだと感じるということはどういうことであろうか。そこでは熱が発生する。したがって、もしわたしたちが感覚の対象に対して熱を生起させなければどうなるだろうか。当然、わたしたちは新しい苦しみの因としての道筋を捨断することとなるのである。これが第一である。

そして第二。法則には二つの法則がある。一つは下向の法則、もう一つは上向の法則である。そして、この上向の法則、つまり高い世界へ至る法則の記憶、および実践、これをなすことにより、わたしたちの下卑な観念はより崇高な観念に移行することとなる。これが、第二のステップである。

そして第三番目は、〝無所有〟、しかも托鉢修行によってただ生きるためだけに食を取る。これを繰り返しながら修行しなさいと、真理勝者サキャ神賢は言っていらっしゃるのである。

◉真我独存と中道

【質問】

この世界において、だれが合一し喜ぶ人なのですか。だれに種々の心が乱れたことがあることはないのですか。だれが双方の極端な状態の証智によって、真ん中において熟慮し、けがされることがないのですか。だれを偉大な男と明言するのですか。だれがこの世で、耐えきれない欲望を圧倒したのですか。

【回答】

種々の感覚の喜びの対象において神聖行をなす、すなわち、渇愛を離れ、いつも記憶修習し、推定し、煩悩破壊する向煩悩滅尽多学男、彼に種々の心が乱れたことがあることはない。彼は双方の極端な状態の証智によって、真ん中において熟慮し、けがされることがない。彼を偉大な男とわたしは明言する。彼はこの世で、耐えきれない欲望を圧倒した。

【解説】

この第一の質問、「合一し喜ぶ」とは真我独存の状態を表わしている。そして、この真我独存のときには、心は乱れないことを表わしている。

これに対するサキャ神賢の答えは、「種々の感覚の喜びの対象において神聖行をなす、すなわち、渇愛を離れ、いつも記憶修習し、推定し、煩悩破壊する向煩悩滅尽多学男、彼に種々の心が乱れたことがあることはない」というものなのである。ここでの「推定」とは、「これは苦であるか楽であるかの検討」ととらえてよい。

第二の質問に対して、サキャ神賢は左右を完全に経験し、理解し、そして中道に立っている者こそを、けがされない魂であると言ってらっしゃるのである。

さらに、左を離れ、右を離れた魂が、大いなるすべての耐えきれない欲望を圧倒した魂であると言っていらっしゃるのである。

◉犠牲祭の意味

【質問】

何を目的とし、この世界において、尊い人たち、適任の人たち、武人たち、祭司たちは、愛欲本質神たちに対して、独断の方法で犠牲祭をしたのですか。

【回答】

この世界において、これらのどんな尊い人たち、適任の人たち、武人たち、祭司たちも、愛欲本質神たちに対して、独断の方法で犠牲祭をしたのは、この世における最高の状態を望み、老いに染みつかされて、犠牲祭をしたのである。

【解説】

これは、犠牲祭、――つまり護摩法の意味について問うているのである。それに対して、真理勝者サキャ神賢は、「それは、結局老いから逃れたいがために、

そして、この現世において最高の状態を得たいという欲望を目的として、犠牲祭、護摩法を行なった」と説いているのである。

◉愛欲本質神に対する犠牲祭

【質問】

この世界において、これらのどんな尊い人たち、適任の人たち、武人たち、祭司たちも、愛欲本質神たちに対して、独断の方法で犠牲祭をしたのですが、犠牲祭のやり方において、怠惰でない彼らは、出生と老いとを渡ったのでしょうか。

【回答】

彼らは望み、称揚し、骨を折って、生けにえとして捧げ、利得を条件として、愛欲に骨を折る。彼ら施しを求められたら喜んで応じる者たちは、生存愛著に染められた者たちであり、出生と老いを渡っていない。

【解説】

まず、この質問のポイントは、愛欲本質神そのものが流転から解放されている魂ではないということである。そして、流転から解放されていない魂に対して、自己のこの現世における最高の状態と、そして、老・死からの解放を願った場合、それはあくまでも欲望というものを背景にしているから、そこからは決して脱却できないのだとサキャ神賢は説いていらっしゃるのである。

◉出生と老いを渡る

【質問】

たとえ彼らが種々の犠牲祭によって、施しを求められたら喜んで応じても、出生と老いとを渡れなかったとすると、それならそれで、愛欲神や人々の世界において、だれが出生と老いとを渡るのですか。

【回答】

世界において、あらゆる種類のものを推定し、世界のどこにおいても、心が乱れたことがあることはなく、安穏で、熱情がなく、錯乱がなく、思い焦がれのない者は、出生と老いを渡った。

【解説】

ここで問題なのは、いかに出生と老いを渡る、つまり、生死を超越する真理の教えが到来することが珍しいかを、真理勝者サキャ神賢が説いていらっしゃることである。

というのは、ここで登場する外道のバーヴァリの弟子たちは、大変有名な弟子たちであり、そして、多くの弟子たちを有している。しかし、彼らですら本質的に解脱の道、あるいは悟りの道を理解することはできない。彼らは、犠牲祭によってそこへ到達できると考えている。しかし、もともと法則が正しくないのだから、

当然到達できないのである。

先程アジタ青年男子に説かれたように（一五五ページ、「三つの要素の打破と進展」参照）、いっさいの煩悩を捨断し、そして善の記憶修習をなし、サマディを修習する者こそ解脱へと至れるのだということが、この質問において明白になったはずである。

◉苦しみが生じる因

【質問】

世界において、多くのいろいろな形態のこれらの苦しみは、何でもかんでも、どこから起こったのでしょうか。

【回答】

世界において、多くのいろいろな形態のこれらの苦しみは、何でもかんでも、

愛取を発端とした結果として生じる。偽りなく、知り得ていず、愛取をなす者は怠け、何度も苦しみに堕ちる。全くこの理由ゆえに、わかっている者は愛取をなさず、苦しみへの生の根源を観察するのである。

【解説】

これは、苦しみが何を因として生じるのかという質問である。それに対して、真理勝者サキャ神賢は、「すべては愛取、つまり、愛のとらわれ、対象の認識の欠落、偏見によって苦しみが生起するのだ」と説いていらっしゃる。したがって、偏見を完全に取り払うならば、つまり、すべての現象をリアリティー、ありのままに見つめるとするならば、その苦しみから解放されるということを説いていらっしゃるのである。

◉喜悦・居所・識別からの解放

【質問】

そのときどのように、揺るぎない者たちは、氾濫、出生と老い、そして、不運な出来事と悲嘆を切り抜けられるのでしょうか。

【回答】

上に、下に、横に、そして真ん中でも、あなたが正智することは何でも、これらにおいて喜悦と居所と識別を払いのけ、生存においてとどまらないようにしなさい。このように時を過ごし、記憶修習し、怠惰でなく実行している向煩悩滅尽多学男は、種々の愛着で結びついているものと、出生と老いと不運な出来事と悲嘆を捨て、まさにこの世で知り得た者は、苦しみを捨断するだろう。

【解説】

この質問に対して、サキャ神賢は喜悦・居所・識別という三つのポイントを挙げて、それにとらわれないことこそが、それらから解放される道だと説いていらっしゃるのである。ではなぜか。

まず、喜悦は対象に対する愛取を招く結果となる。

次に、居所であるが、これは〝場所〟と言い換えることができる。この場所も同じように、その場所の記憶修習をしすぎると、必ずその場所へ流転する可能性を招く結果となる。

そして、識別は一つのものからの離愛著とともに、他方への帰着を意味するのである。

したがって、喜悦、居所、そして識別からの解放、これがすべての要素からの解放の源であることは言うまでもない。

◉疑念や質問の無意味さ

【質問】

種々のどのようにと問うことから、わたしを救済してください。

【回答】

世間において、どのようにと問う者のだれをも、わたしは救済に臨ませることはないだろう。そして、最上の法則を認識することによって、そのように、あなたはこの氾濫を渡ることができるだろう。

【解説】

修行の実践に対する疑念・質問、これは無意味である。真理の実践は、その実践段階の完全なるすべての理解、そして修行というプロセスをとるわけではない。なぜならば法則において高度な法則になると、無智に覆われている魂は、その法

則の概要を理解することができないからである。

したがって、まず自分の今の智慧のレベルにおいて、対象であるグル、あるいは真理勝者をしっかりととらえ、そして、その法則のある部分が納得できた段階で、そのすべてを理解しようとせず法則の実践を行なう、――これこそが救済される側の立場であるということをサキャ神賢は説いていらっしゃるのである。つまり、疑念を持った者は救済されないということなのである。

もちろん、すべてを理解でき、実践できるならば、もっと素晴らしいことであるのは言うまでもない。

◉遠離の法則

【質問】

わたしが識別すべき、遠離の法則を諭してください。

【回答】

上に、下に、横に、そして真ん中でも、あなたが正智することは何でも、これを世界において、「愛着をもって離れないものだ」と知り、生存非生存に対して渇愛をなしてはならない。

【解説】

すべての現象、つまり言葉を換えるならば、グナの干渉から離れるためには、どのようにしたらいいかという質問である。

それに対して、サキャ神賢はあらゆる現象の把握ですら、それに対して愛着してはならない、つまり、正しい智慧によって観察し、その対象を智慧によってとらえたとしても、それに愛着してはならないということを言っていらっしゃるのである。そして、それにより、形状界・非形状界のいっさいのものにとらわれないこと、これこそが遠離の道であり、そして解脱の道であると説いていらっしゃ

るのである。

◉輪廻の大海を渡る方法

【質問】

わたし一人では、大きな氾濫を渡ることに目印がなく、全く立ち向かうことができません。それを目印として、この氾濫を渡れるような対象の固定を明言してください。

【回答】

無所有の状態を凝視しながら、記憶修習を持って、「あることはない」、このようなことによって、あなたは氾濫を渡りなさい。種々の感覚の喜びの対象を捨断し、講演にしたがってやめ、渇愛を破壊し、夜も昼も努めていなさい。

【解説】

これは、輪廻の大海を渡る方法についての質問である。何をそれぞれのポイントとして目的地、つまりかの岸へ到達すればいいかという質問に対して、サキャ神賢は次のポイントを挙げていらっしゃる。

まず第一は、無所有であることを思念しなさいと。

次は、種々の感覚の喜びを捨断するように記憶修習しなさいと。つまり、種々の感覚の喜びの対象は、本来は存在しないんだということを記憶修習しなさいと言っていらっしゃるのである。

そして第三の「講演にしたがってやめ」というのは、法則、講話を何度も聞き、それにしたがって五感を捨断しなさいと、感覚の喜びを捨断しなさいと言っていらっしゃるのである。

したがって、無所有、それから感覚の喜びの対象の捨断ということがポイントになる。そして、決して渇愛を有してはならないということである。つまり、ポ

イントは外側から内側に向かっているのである。

◉認知離解脱

【質問】

すべての感覚の喜びの対象において愛著を離れ、無所有の状態を目印として、他のものを捨て、最も優れた認知離解脱において離解脱した者は、そこで悪にけがされずにとどまることができるでしょうか。

【回答】

すべての感覚の喜びの対象において愛著を離れ、無所有の状態を目印として、他のものを捨て、最も優れた認知離解脱において離解脱した者は、そこで悪にけがされずにとどまることができる。

【解説】
認知離解脱というのは、認知して離解脱に至るということである。

◉離解脱後の状態

【質問】
彼がそこで悪にけがされずに、たくさんの雨期の間、同様にとどまるならば、そこでまさに、離解脱した彼は心が醒めるのでしょうか。そのような識別は存在するのでしょうか。

【回答】
風の素早い動作で投げ飛ばされたプラズマが、消失し行ってしまい、数えられなくなるように、このように、神賢は心の要素と身体から離解脱して、消失し行ってしまい、数えられなくなる。

【解説】

比喩による説明であるからわかりづらいが、ここでの内容は、まず、離解脱が生じ、その後に、一つ一つの、それまでの愛著の要因そのものが、ちょうど風で投げ飛ばされるプラズマのように崩壊していくプロセスを、サキャ神賢は説いていらっしゃるのである。

結局、離解脱、イコール最終地点ではなく、離解脱した後に心が鎮まり、煩悩が落ちていくプロセス、これによって最終地点、完全なるマハー・ボーディ・ニルヴァーナが到来すると、サキャ神賢は説いていらっしゃるのである。

◉最終解脱の状態

【質問】

その消失して行った人か、それともあるいは、彼はあることがないのでしょうか。それとも偽りなく、不滅で異常がないのでしょうか。

【回答】

消失して行った人に、大きさがあることはない。それによって彼を断言するものが、彼にあることはない。すべての法則が根こそぎにされたとき、すべての言い方の道も根こそぎにされるのだ。

【解説】

これは、最終解脱をし、そして煩悩のすべてが止滅した段階において、その人の意識は宇宙、あるいは宇宙を超えたものといったような規定すべてから解放されるということを表わしている。したがって、いかなる方法によっても最終地点に到達したものの状態を言い表わすことはできないと、サキャ神賢は言っていらっしゃるのである。

しかし、これを言葉という観念によって表現するならば、五つのとらわれの集積と三界から完全に解放された状態、これこそが最終の解脱であるということに

なる。そして、それは真我独存に他ならず、また、この真我が三界に存在していないことを意味しているのである。

「すべての法則が根こそぎにされたとき」というのは、いっさいの法則が三界と五つのとらわれの集積に関係しているわけだから、そのものが完全に影響を与えないということ、完全に一元の世界に入ってしまうということを意味している。

◉神賢の条件

【質問】

世界において、神賢たちがいらっしゃると、人々は断言しますが、ではまさにそれはどのようにでしょうか。精通が起因した人を、実は神賢と断言するのでしょうか。それとも偽りなく、生活によって生じた人でしょうか。

【回答】

実感したことによってではなく、教学によってではなく、精通によってではなく、ここに善の人たちが、神賢とは疑惑と敵意を解き、錯乱がなく、思い焦がれがなく実行すると断言する彼らを、わたしは神賢たちと明言する。

【解説】

ここで、賢い神〝ムニ（神賢）〟についての説明が出ている。

このムニの条件は、まず疑惑と敵意がないことである。その第一、疑惑は何によって止滅するのかというと、真理の実践、つまり法則そのものになりきっているということである。その第二の敵意がないことについては、四無量心の偉大なる完成者であることを表わしている。

そして第三は、いろいろな思い込みが全くないことを表わしている。

そして第四は、未来に対する希望をいっさい止滅した状態で、しかも奮闘努力

している魂を表わしている。この魂こそ、神賢なのである。

◉解脱の要点

【質問】

これらの出家修行者である祭司たちで、実感したことに関して、同一に教学によって清潔を断言し、同一に戒誓で清潔を断言し、多くの形状・容姿をもって、清潔を断言するどんな人でも、もし神賢が彼らは氾濫を渡っていないと明言するのならば、それならそれで、愛欲神や人々の世界において、だれが出生と老いとを渡ったのでしょうか。

【回答】

わたしは、「すべての出家修行者である祭司たちが、出生と老いに包囲されている」と明言するのではない。自分が所有する、ここに実感したこと、あるいは

教学、あるいは考えたこと、あるいは戒誓もすべて捨断し、多くの形状・容姿もすべて捨断し、渇愛を理解し、無漏である人たち、偽りなく彼らが「氾濫を渡ったひとかどの人たち」である。

【解説】

これについては、大変重要な仏教の教えにおける示唆を感じることができる。その要点は、体験、教学、そして戒誓の三つだけでは解脱していないことを表わしているのである。では、何をそれに具足すれば、老・死を渡り、解脱したことになるのであろうか。

ここでの「捨断」はとらわれないととらえるべきである。よって、第一に体験に対してとらわれない。第二に、教学したことに対してとらわれない。第三に、自分自身の考えについてとらわれない。第四に、戒誓についてとらわれない。そして第五に、いろいろな形状・容姿に対して、同じようにとらわれないというこ

とである。

そして、これを前提とし、渇愛とはどのようなものであるか、その本質と生起と滅尽と滅尽の方法を理解し、それによって全くエネルギーの漏れのなくなった人、――この人こそを「氾濫を渡ったひとかどの人たち」、つまり解脱者であるといっているのである。

◉不消の煩悩破壊

【質問】

ゴータマの救済計画より前、「このようであった、このようになるだろう」と、これらの人々が以前に明らかにしたこと、それはすべて某々しかじかであり、それはすべて間違った見解の増大でした。神賢よ、わたしはそこで楽しみを見いだしませんでした。そして、あなたはわたしに渇愛の根絶の法則を言明なさいました。それを知り、記憶修習し、実行しながら、世界における固執を渡ります。

【回答】

ヘーマカよ、ここに実感された聴聞された考えられた識別された、種々の喜びにおいて、衝動愛著の切除である、不消の煩悩破壊の手段がある。これを認識し、記憶修習し、この世界で完全覚醒し、そして、いつも寂静に臨んだ人たち、彼らは世界における固執を渡ったのである。

【解説】

この八番目のヘーマカについては、サキャ神賢の前生における弟子であったことをうかがわせる。なぜならば、彼はいかなる他の法則に対しても喜びを見いださず、そして、サキャ神賢を礼拝に行ったそのとき、彼の内側に完全なる煩悩破壊に対する確信がわいたからである。

ここで一つ、〝不消〟ということについて説明をしたいと思う。煩悩破壊については、当然煩悩の減少・煩悩の増大が存在する以上、煩悩破壊と同時に煩悩の

生起も存在する。つまり、決して煩悩が増大しない方法、これを〝不消〟と言っているのである。

◉離解脱の三つの要素

【質問】

種々の感覚の喜びの対象が住むことなく、渇愛が存在せず、そして、どのようにと問うことを渡った人、彼の離解脱はどのようなものですか。

【回答】

種々の感覚の喜びの対象が住むことなく、渇愛が存在せず、そして、どのようにと問うことを渡った人、彼の離解脱は別ではない。

【解説】

これは、種々の感覚の喜びが存在しない。そして二番目に渇愛が生じない。三番目に疑念がない。この三つの要素を有した人は、どのような状態の人であるかという質問をサキャ神賢になしているのである。

これに対して、サキャ神賢は、その人こそ離解脱した人と変わりはない、つまり離解脱した人であると言っているのである。

◉神賢の要素

【質問】

彼は要素の蓄積の影響を受けないのでしょうか。それとも、望みがあるのでしょうか。彼は著しく精通を有する者なのでしょうか。それとも、智慧を有することを得ようとしているのでしょうか。それだから、わたしは神賢を識別したいのです。わたしにそれを数え上げてください。

【回答】

彼は要素の蓄積の影響を受けず、そして、彼は望みがあることはない。彼は著しく精通を有する者であり、智慧を有することを得ようとしているのではない。このように同様に、神賢を識別しなさい。道徳的汚点がなく、愛欲による生存において、愛着のきずなで結びついていない。

【解説】

ここでは、神賢とは何であるか、つまりムニとは何であるか、そのムニの要素について項目を数え上げてください、つまり、分類してくださいというふうに質問してるのである。

それに対して、サキャ神賢の答えは、「彼は要素の蓄積の影響を受けず、そして、彼は望みがあることはない。彼は著しく精通を有する者であり、智慧を有することを得ようとしているのではない。道徳的汚点がなく、愛欲による生存にお

いて、愛着のきずなで結びついていない」と数え上げているのである。

◉かの岸とは異なる〝陸〟

【質問】

大きい恐怖ある氾濫が生じ、湖に似たものの真ん中でとどまっている、老いによる死の神に打ちひしがれた人たちの陸を語ってください。そして、引き続いて、これがあることがないように、あなたはわたしに陸を言明してください。

【回答】

道徳的汚点がなく、愛執がないこと、これが陸に別のものではなく、老いによる死の神の完全な破壊である煩悩破壊である。これを認識し、記憶修習し、この世界で完全覚醒した人たち、彼らは欲望満足で破滅天の後に続くことはなく、彼らは破滅天に喜んで仕えることはない。

【解説】

これは、老いにより苦しんでいる人が、道徳的汚点がなく、愛執がない――つまり、例えばこの現世に対してとらわれがない、いっさいの心の働きに対してとらわれがないという状態になること、この状態こそが〝陸〟であると言っていらっしゃるのである。

この〝陸〟とは何かというと、一時的に安らがせる場所、しかし、まだそこは〝かの岸〟ではないことを表わしている。また、「この世界で完全覚醒した人たち」とは、ようやく愛欲界から解放されたということを意味している。

◉安穏の条件

【質問】

安穏の手段を明言してください。

【回答】

種々の感覚の喜びの対象において、意地汚い欲望を除去しなさい。解放を安らぎと見て、道徳的汚点である、獲得されたものや真我でないものをあなたに存在させてはならない。以前のものは枯らしなさい。後に道徳的汚点をあなたに存在させてはならない。存在の現存状態でとらわれないならば、あなたは寂静に臨んで動き回って生活するだろう。

【解説】

ここでのポイントは、安穏、安らぎの条件について質問され、それに対してサキャ神賢は答えているのである。

まず第一番目は、感覚の喜びの対象に対する意地汚い欲望を除去する。

第二は、真我以外のいかなるもの、つまり道徳的汚点に対応するいかなるものも存在させてはならない。

第三は、以前から所有している内側の欲望、あるいはデータについて、それを止滅しなさいということ。

第四は、その後に道徳的汚点を生起させてはならないということを言っていらっしゃるのである。

◉死の軍勢を破る方法

【質問】

住宅を捨てて、渇愛を断ち切り、欲望や性欲がなく、喜悦を捨てて、氾濫を渡り、離解脱し、期間を捨てている大変頭の良い方に問います。あなたの話題を要望しながら、様々な人々が種々の地方から会合しています。どうか、あなたは彼らに明らかにしてください。全く同様に、あなたはこの法則を知っているからです。

【回答】

渇愛を持つことをすべて除去しなさい。というのは、上に、下に、横に、そして同一に、真ん中という世界において、とらわれるどんなものでも、まさにそれによって破滅天は、生命あるものに取り入るからである。この理由ゆえに、認識し理解しながらとらわれないようにしなさい。この死の神の領域にしっかりつかまれた弟子は「(破滅天に)帰属の生命体たち」であると凝視しながら、向煩悩滅尽多学男は、すべての世界において道徳的汚点を記憶修習する。

【解説】

この項目では、渇愛の除去こそが死の軍勢を破るただ一つの方法であるということを言っていらっしゃる。ここでの「道徳的汚点を記憶修習する」というのは、道徳的汚点に注意して、それを破らないような形の記憶修習をするということである。

◉認識離解脱

【質問】

非神秘力を細分することである認識離解脱を語ってください。

【回答】

種々の愛欲の衝動と種々の落胆との両方の捨断を、そして、頑固の排除、種々の後悔の防止を、無頓着と記憶修習による罪のないこととを、先に起こった正しい論法を、非神秘力を細分することである認識離解脱と、わたしは語る。

【解説】

これは、認識離解脱とは何でしょうかという質問に対するサキャ神賢の答えである。

第一と第二は種々の愛欲の衝動と落胆の捨断。第三は頑固の排除。四番目は種々

の後悔の防止。第五に無頓着と記憶修習による罪のないことを挙げていらっしゃるのである。

「先に起こった正しい論法」について説明しておこう。これは、頑固の排除とか落胆の排除とか後悔の排除とかを実践させるための、それらを支えている論法があるわけである。それを認識離解脱といってるのである。

◉輪廻転生のきずな

【質問】

では何が世界へのきずなでしょうか。では何がその吟味でしょうか。その何の中断によって煩悩破壊といわれるのでしょうか。

【回答】

喜悦が世界へのきずなであり、熟考がその吟味であり、渇愛の中断によって煩

悩破壊といわれる。

【解説】

これはまず、輪廻転生をする場合のきずなが何であるかということ、それから、二番目がそれをどのように吟味するかということ、三番目はそれをどのように捨断するかということ、この三つについての質問である。

サキャ神賢は、その世界に対する喜悦がきずなであり、それに対して熟考することが吟味であり、渇愛の中断によって煩悩破壊があるとおっしゃっている。

◉識別の打破

【質問】

どのように記憶修習し、実行すると、種々の識別は打破されるのでしょうか。

【回答】

心の中と外側との感覚に喜びを見いださず、そのように記憶修習し、実行すると、種々の識別は打破される。

【解説】

ここでは、識別の打破について質問されている。

サキャ神賢は「心の中と外側との感覚に喜びを見いださず、そのように記憶修習し、実行すると、種々の識別は打破される」と説いておられる。要するに、無頓着の修行をせよということなのである。

◉真理勝者のようになるには

【質問】

離生存した形状・容姿の認知を持ち、すべての身体を捨断し、心の中と外側と

に「何もあることはない」と見る人の精通を、わたしはお尋ねします。どのようにそのような人は導かれ得るのでしょうか。

【回答】

すべての識別の継続を証智しながら、真理勝者はこれのある状態、離解脱した、それの最終地点をわかっている。無所有の状態の起源をわかっており、「喜悦がきずなである」と、まさにこのように証智し、これからそこで正観する。その完成した祭司には、この精通、真理がある。

【解説】

質問は、どのようにしたら真理勝者のようになるのかということである。

まず第一は、すべての識別そのもの、自分自身の中でどのような識別がなされているかを正確に理解しながら、それが完全に崩壊した状態、なくなった状態ま

で理解しているということである。

それから第二は、無始の過去の真我独存位の状態が理解できていること。

それから第三番目は、その真我独存位からどのようにして落下したかというと、グナの干渉によって、歓喜によって、喜悦によってとらわれたんだと、つまり、きずながができたんだということを理解していること。

そして第四は、真我とグナとの関係についての正しい観察が行なわれていることなのである。

◉空の実態

【質問】

世界をどのようにじっと見つめる人に、死の神の王は訪れないのでしょうか。

【回答】

いつも記憶修習し、自己の謬見を後で抜き捨て、世界を空（くう）とじっと見つめなさい。このように死の神を渡ることができる。世界をこのようにじっと見つめる人に、死の神の王は訪れない。

【解説】

これは大変高度な内容である。つまり、空の実態とは何かということに言及していらっしゃるのである。

それは、データによって空が阻害されているわけだが、そのデータ、イコール謬見解を絶えず取り払う作業を行なうならば、死の神は訪れないということを言っていらっしゃるのである。

◉身体のとらわれの捨断

【質問】

わたしは老いて、力がなく、賛美から離れ、目は清潔ではなく、聞くことは快適ではありません。わたしが気絶して、中途で滅びないように願います。わたしが識別すべき、ここに出生と老いの中断となる法則を明かしてください。

【回答】

種々の形状-容姿において悩まされているのを見ても、種々の形状-容姿において、怠惰な人々は苦しめられる。この理由ゆえに、あなたは怠惰でなく、再び生存することがないように、形状-容姿を捨てなさい。

【解説】

ここでは、肉体についての検討はなされていない。なぜならば、彼のステージ

はすでに形状界へ突っ込んでいたとサキャ神賢は考えていたからである。

よって次に、その形状界における身体に対するとらわれを捨断しなさいとサキャ神賢は説いていらっしゃる。これによって彼は、法身（ダルマカーヤ）、つまり形のない世界、非形状界へと没入し、より長い生命原理によって生きることができるというのである。

ここで少し解説を加えておこう。

ピンギヤの質問の中に、「老いて、力がなく、賛美から離れ、目は清潔ではなく、聞くことは快適ではありません」とあるが、それは今の肉体の状態を言っているのである。また、「気絶して、中途で滅びないように願います」という言葉は、サキャ神賢の教えの最中に死んでしまうかもしれないから、それを守ってくださいと言っているのである。

また、サキャ神賢の言葉、「種々の形状・容姿において、怠惰な人々」とは、形状・容姿に対して熟考しない、検討しない、イコール怠惰ということを表わして

いるのである。

◉渇愛からの解放

【質問】

四つの方角、四つの東西南北の中間位、上に、下に、この十の方角、世界において、あなたに見られず、あるいは、聞かれず、考えられず、および、識別されない道徳的汚点はありません。わたしが識別すべき、ここに出生と老いの中断となる法則を明かしてください。

【回答】

渇愛のとりこになり、焼けるような熱さが生じ、老いに打ちひしがれた適任の人々を凝視することによって、この理由ゆえに、あなたは怠惰でなく、再び生存することがないように、渇愛を捨てなさい。

【解説】

これは、渇愛のとりこになっている人たちの様子を正観すること、正しく観察することによって、自分自身がそこから解放されなさいという教えを説いていらっしゃるのである。

四、かの岸への軌道

◉ 〝方便〟の位置づけ

「一人の闇を払う方が座っておられ、
彼は出生が良く光をもたらす方です。
ゴータマは広大な著しい精通の方であり、
ゴータマは広大で頭の良い方です。
わたしに現実に利益をもたらし、
直接的であり、
渇愛の破壊、息災の法則を指し示された方には、
およそたとえ話があることはないのです。」
と聖者ピンギヤ。
「ピンギヤよ、

今では、瞬く間も、
彼から（信と喜と意識と記憶修習が）離れているのか。
広大で著しい精通の方であるゴータマから、
広大で頭の良いゴータマから。
あなたに現実に利益をもたらし、
直接的であり、
渇愛の破壊、息災の法則を指し示された方には、
およそたとえ話があることはないのである。」

ここは非常に重要なところである。
方便とは、その法則を理解できない衆生に対する方法論であり、例えば、この十六人の、外道であるが聖者のように真理を探求し続ける者に対しては、方便を使う必要がないということをここは説いているのである。それを「たとえ話があることはない」とおっしゃっているのである。

『最高の要点』質問一覧

質問者	質問	回答
アジタ	①わたしたちを限定しているもの	①非神秘力
	②光を遮るもの	②様々な欲求と怠惰さ
	③わたしたちをけがすもの	③愛著を感じる対象
	④その恐怖とは	④苦しみ
	①〝流れ〟を防止し自制するもの	①記憶修習
	②〝流れ〟を弱めるもの	②智慧
	どこで心の要素と形状・容姿が打破されるか	識別の滅尽

ティッサメッテッヤ	真我独存、中道を確立しているのはだれか	感覚の喜びの対象において神聖行をなす向煩悩滅尽多学男	・現世において最高の状態を得たいという欲望のため ・老いから逃れたいため
プンナカ	犠牲祭の意味		生存愛著に染められた者で、出生と老いを渡っていない
	愛欲本質神たちに対する犠牲祭で、出生と老いを渡ったか		
	推定された法則がある者と有学と独断がある者の進展	・感覚の対象に対して熱を生起させない ・高い世界へ至る法則の記憶と実践 ・無所有	

プンナカ	出生と老いを渡ったのはだれか	愛取	いっさいの煩悩を捨断し、善の記憶修習をなし、サマディを修習する者
メッタグー	苦しみが生じる因	喜悦・居所・識別にとらわれないこと	
ドータカ	汜濫、出生と老い、不運な出来事と悲嘆から解放されるには	法則すべてを理解しようとせず法則の実践を行なう	
	疑念や質問からの解放	愛着せず、形状界・非形状界のいっさいのものにとらわれないこと	
	遠離の法則		

ウパシーヴァ	輪廻の大海を渡る方法	・無所有 ・感覚の喜びの対象の捨断 ・渇愛の破壊		
	認知離解脱した者は、悪にけがされずにとどまるか	認知離解脱した者は、悪にけがされずにとどまる		
	離解脱後の状態	愛著の要因そのものが崩壊していく		
	最終解脱の状態	言葉で言い表わすことはできない		
ナンダ	神賢の条件	・疑惑がないこと ・敵意がないこと ・思い込みが全くないこと ・未来に対する希望を止滅して奮闘努力していること		

ナンダ	体験・教学・戒誓だけで解脱するか	体験・教学・戒誓だけでは解脱しない	
	解脱者とは	・体験・教学・自分自身の考え・戒誓・形状・容姿にとらわれない ・渇愛を理解し、エネルギーの漏れのない人	
ヘーマカ	世界における固執を渡ること	不消の煩悩破壊の手段	離解脱している
トーデッヤ	種々の感覚の喜びがなく、渇愛がなく、疑念がない人は、離解脱しているか		
	神賢の要素		・要素の蓄積の影響を受けず、望みがない

		・精通を有する ・道徳的汚点がない ・愛着のきずなで結びついていない
カッパ	老いにより苦しんでいる人の〝陸〟	・道徳的汚点がないこと ・愛執がないこと
ジャトゥカンニン	安穏の条件	・意地汚い欲望の除去 ・真我以外のいかなるものも存在させない ・以前から所有しているデータの止滅 ・その後に道徳的汚点を生起させない

バドラーヴダ	死の軍勢を破る方法		渇愛の除去
ウダヤ	認識離解脱	①輪廻転生のきずなとは何か ②それをどのように吟味するか ③それをどのように捨断するか	①喜悦 ②熟考 ③渇愛の中断
		識別の打破	無頓着の修行

・愛欲の衝動の捨断
・落胆の捨断
・頑固の排除
・後悔の防止
・無頓着と記憶修習による罪のないこと

ポーサーラ	真理勝者のようになるには	・識別のあらゆる状態の理解 ・無始の過去の状態の理解 ・喜悦がきずなであることの理解 ・正しい観察が行なわれていること	
モーガラージャン	死を超えるには、世界をどのように見つめるか	謬見解を絶えず取り払い、世界を空と見つめる	
ピンギヤ	出生と老いの中断となる法則	身体のとらわれの捨断	
	出生と老いの中断となる法則	渇愛からの解放	

※オウム真理教では、本来の意味を正確に表わしていない既製の仏教用語は用いず、パーリ語原典を忠実に翻訳し、吟味した結果、決定した訳語を使っています。以下に、代表的な言葉の対比表を掲げますので参照してください。また、仏教・ヨーガの言語対比表も参考までに掲載しました。

◆言語対比表

欲界→愛欲界
無間地獄→超期間激苦地獄
叫喚地獄→号叫激苦地獄
鉢特摩地獄→紅蓮華のような状態になる激苦地獄
餓鬼→低級霊

阿修羅→不飲酒天
憤怒天→意識堕落天
戯忘天→戯れ堕落天
地居天→地上愛欲神天
四天王衆天→四大王天
持国天→堅固王国天
増長天→成長天
広目天→統治変化自在天空天
毘沙門天、多聞天→守庶民外傷天
夜叉→人食い鬼神
忉利天→三十三天
帝釈天→有能神
夜摩天→支配流転双生児天
閻魔王→支配流転双生児王
兜率天→除冷淡天

楽変化天、化楽天→創造満足天
他化自在天→為他神以神通創造欲望満足
従事天
悪魔→破滅天

色界→形状界
梵天→神聖天
梵衆天→神聖衆愛欲神天
梵輔天→神聖臣天
大梵天→大神聖天
浄天→美天
遍浄天→総美愛欲本質神天
広果天→偉大果報愛欲本質神天
浄居天→清潔居住天
無煩天→超空間愛欲神天

無熱天→超燃焼愛欲神天
善現天→善安楽愛欲神天
善見天→善現象愛欲神天
色究竟天→超越童子愛欲本質神天

無色界→非形状界
空無辺処→空間無辺境
識無辺処→識別無辺境
無所有処→無所有境
非想非非想処→非認知非非認知境

想受滅→認知経験滅尽

須弥山→完全無欠山
東勝身洲→東の高貴なる身体を得る大陸
南贍部洲、閻浮堤→南のバラリンゴの大陸
西牛貨洲→西の願いがかなう牛の大陸
北倶盧洲→北の悪しき音の大陸

成劫→再生期
住劫→継続期
壊劫→還元期

釈迦牟尼→サキャ神賢
如来→真理勝者
応供→供養値魂
正等覚→最上正覚者
明行足→智徳成就者

善逝→最上善逝
世間解→世間解（変更なし）
無上士→無上士（変更なし）
調御丈夫→丈夫調御者
天人師→天人師（変更なし）
仏陀→覚者
世尊→世尊（変更なし）

菩薩→到達真智運命魂
比丘→向煩悩滅尽多学男
比丘尼→向煩悩滅尽多学女
優婆塞→帰依信男
優婆夷→帰依信女
僧伽→出家教団
長老→高弟

声聞→多学の弟子
沙門→出家修行者
沙弥→少年出家者
遊行者→托鉢修行者

バラモン→祭司
クシャトリヤ→武人
ヴァイシャ→庶民
シュードラ→奴隷

四双八輩→四対の人々・八つの宗教的特性を持つ人々
預流→真理の流れに入ること
一来→（愛欲界に）一度だけ再生すること
不還→不還（変更なし）

阿羅漢→供養値魂
四預流支→四つの真理の流れに入る段階

四聖諦→四つの絶対的真理
苦聖諦→苦しみの絶対的真理
集聖諦→苦しみの生起の絶対的真理
滅聖諦→苦しみの滅尽の絶対的真理
道聖諦→苦しみの滅尽に至る方法の絶対的真理

四念処→四つの記憶修習述

四正断、四正勤→四つの正しい努力

四如意足→四つの如意の基礎
欲如意足→決意如意の基礎
精進如意足→精進如意の基礎
心如意足→思念如意の基礎
観如意足→観慧如意の基礎

五根→五つの潜在性
信根→信の潜在性
精進根→精進の潜在性
念根→記憶修習の潜在性
定根→サマディの潜在性
慧根→智慧の潜在性

五力→五つの能力
信力→信の能力
精進力→精進の能力
念力→記憶修習の能力
定力→サマディの能力
慧力→智慧の能力

七覚支→七つの覚醒段階
念覚支→記憶修習正覚段階
択法覚支→検討正覚段階
精進覚支→精進正覚段階
喜覚支→喜正覚段階
軽安覚支→静寂正覚段階
定覚支→サマディ正覚段階
捨覚支→無頓着正覚段階

八正道→聖なる八段階の道
正見→正見解
正思惟→正思惟（変更なし）
正語→正語（変更なし）
正業→正行為
正命→正生活
正精進→正奮闘
正念→正記憶修習
正定→正サマディ

三苦→三つの苦しみの本質
苦苦→苦しみの苦しみの本質
行苦→悪い構成要素の苦しみの本質
壊苦→悪化の苦しみの本質

三受→三つの感覚
楽受→楽の感覚
苦受→苦しみの感覚
不苦不楽受→不苦不楽の感覚

四無量心
慈→聖慈愛
悲→聖哀れみ
喜→聖称賛
捨→聖無頓着

五取蘊→五つのとらわれの集積
色取蘊→形状・容姿のとらわれの集積
受取蘊→感覚のとらわれの集積
想取蘊→表象のとらわれの集積
行取蘊→経験の構成のとらわれの集積
識取蘊→識別のとらわれの集積

五蓋→五つの障害
貪欲蓋→愛欲の衝動による障害
瞋恚蓋→害心による障害
惛眠蓋→頑固と愚鈍による障害
掉悔蓋→興奮と後悔による障害
疑蓋→疑念による障害

五妙欲→五つの愛欲の構成部分
色→形状・容姿
声→声
香→香り
味→味
触→接触

五下分結→五つの下位に結びつけるきずな
有身見→有身謬見
疑→疑念
戒禁取→戒禁のとらわれ
貪欲→愛欲の衝動
瞋恚→害心

五上分結→五つの上位に結びつけるきずな
色貪→形状愛著
無色貪→非形状愛著
慢→慢（変更なし）
掉挙→興奮
無明→非神秘力

八解脱→八つの離解脱
八勝処→八つの克服境
十遍処→十全境
十波羅蜜→十の徹底

十二縁起の法→十二の条件生起の段階
無明→非神秘力
行→経験の構成
識→識別
名色→心の要素-形状-容姿
六処→六つの感覚要素と対象
触→接触
受→感覚
愛→渇愛
取→とらわれ
有→生存
生→出生
苦→苦しみ
信→信（変更なし）
悦→歓喜

喜→喜（変更なし）
軽安→静寂
楽→楽（変更なし）
三昧→サマディ
如実知見→如実精通見解
遠離→現世否定
離貪→離愛著
解脱→離解脱

涅槃→煩悩破壊
般涅槃→完全煩悩破壊
中般涅槃→中完全煩悩破壊
生般涅槃→滅少完全煩悩破壊
無行般涅槃→形状界にて経験の構成がなく功徳の果報を受けつつある完全煩悩破壊
有行般涅槃→形状界にて経験の構成があり真理の実践による完全煩悩破壊
一種者→一つの種子を持つ者
家家者→徳の高い家から家へと転生する者
極七返→最高七回流転者

正智→正精通
正解脱→正離解脱
心解脱→心の離解脱
慧解脱→智慧の離解脱

殺生→殺生（変更なし）
偸盗→与えられないものを強奪すること
邪淫→愛欲における邪悪な行為
妄語→嘘の言い方
綺語→軽薄語
悪口→乱暴な言葉
両舌→中傷の言葉
貪→愛著
瞋→邪悪心
癡→迷妄

愁→不運な出来事
悲→悲嘆
苦→苦しみ
憂→激痛
悩→悩み

五趣→五つの方向
善趣→幸福に向かうこと
悪趣→悲痛に向かうこと

カルマ→要素の蓄積
法→法則
梵行→神聖行
布薩→戒誓行
波羅提木叉→約束維持解放

頭陀→断修行障礙
袈裟衣→赤っぽい黄色の衣
衆生→生命体
四大種→四大元素
本生経→輪廻転生談

◆仏教・ヨーガ　言語対比表

愛欲界―現象界
形状界―アストラル世界
非形状界―コーザル世界
愛著―サットヴァ
邪悪心―ラジャス
迷妄―タマス

《ほ》
法則 157
方便 202,203
法身 199
煩悩破壊 152,182,192,193

《ま》
マハー・ボーディ・ニルヴァーナ 175

《む》
無所有 157,171,172
無頓着 192,194
ムニ 178,185
無漏 180

《ゆ》
有学 155,156

《よ》
欲求 151,152
四つの静慮 35

《ら》
落胆 191

《り》
陸 186,187
離解脱 173,174,183,184
輪廻転生 192,193
輪廻の大海 171,172

《る》
流転 162

《た》
体験 180
怠惰 151,152,199
正しい観察 196
正しい論法 192
ダルマカーヤ 199

《ち》
智慧 135,153,154,170
中道 158,159

《て》
低級盈域 153
データ 189,197
敵意 178
テレパシー 138,139
転輪王 138

《と》
道徳的汚点 187,188,189,190
動物界 153
独断 155,156

《な》
流れ 153

《に》
肉体 155
認識離解脱 191,192
認知 174
認知離解脱 173,174

《ね》
熱 157

《は》
破滅天 186,190
バーヴァリ 133,139,163
場所 167

《ひ》
非形状界 170,199
非神秘力 150,151,152,191
人食い鬼神 25,30
表象 155
謬見解 197

《ふ》
不消 182,183
不消の煩悩破壊 181
布施 37
奮闘努力 178

《へ》
ヘーマカ 182
偏見 165

苦しみ 151,152

《け》

経験の構成 155
形状-容姿 180
形状界 170,199
下向の法則 157
解脱 36,40,150,156,164,170,179,180
解脱者 181

《こ》

講演 171,172
後悔 192
心の要素-形状-容姿 154
護摩法 160

《さ》

最高の要点 24
最終解脱 175,176
サキャ神賢 25,40,135,139,150,155,157,159,160,162,163,165,169,170,172,175,176,182,184,185,188,193,194,199
悟り 36,40
サマディ 12,164
三界 176
三十二の顕著な特徴 138
ザンゲ 34

《し》

食の供養 37
識別 154,155,166,167,193,194,195
地獄界 153
質問 168
死の軍勢 189,190
自分自身の考え 180
四無量心 178
止滅 189
捨断 157,164,171,172,180,191,198
十の能力者 138
守庶民外傷天 25,28,29
守庶民外傷天の功徳 27
熟考 192,193
上向の法則 157
静慮 12
真我 149,177,188,196
真我独存 158,159,177,196
神賢 177,178,179,184,185
心臓 149
神秘力 150
真理勝者 138,160,194,195

《す》

推定された法則 155

《せ》

生命に対する愛着 133
善の記憶修習 164

索　引

《あ》

愛執 186,187
愛取 165,167
愛著 173
愛著を感じる対象 151,152
愛着 170
愛欲界 187
愛欲の衝動 191
愛欲本質神 133,135
アジタ 164
アストラル 149,150
頭 149
頭のあちこちが割れる状態 150
安穏 187,188

《い》

意識による質問 138
意地汚い欲望 188
一元の世界 177
五つの下位に結びつけるきずな 36
五つのとらわれの集積 155,176,177
居所 166,167
イメージ 149

《お》

老い 160
思い込み 178
遠離 170
遠離の法則 169

《か》

戒晉 180
渇愛 171,172,180,190,200,201
渇愛の中断 192,193
かの岸 186,187
感覚 155
感覚の喜び 184
感覚の喜びの対象 171,172,183,188
歓喜 196
観念 156
頑固 191

《き》

喜悦 166,167,192,193,196
記憶修習 153,172,190,192
教学 180
犠牲祭 160,163
疑念 168,169

《く》

空 196,197
グナ 170,196

あなたに絶対の幸福を約束する

――オウム真理教

心身の悩みを解決したい
超健康体を得たい
豊かな生活を送りたい
素晴らしい人間関係を築きたい
スーパー・パワーを身につけたい
来世も幸福に生きたい
解脱し、永遠の至福を得たい

最高の教義、最高の奥儀、そして麻原尊師のもと、すべては確実に実現します。

●オウム真理教が誇る三つの基本的修行体系

1、マハーヤーナ

現実生活をより豊かにし、幸福な人生をお約束します。ご年輩の方、仕事が忙しく時間のあまり取れない方にお勧めです。

2、タントラ・ヴァジラヤーナ

行法、イニシエーションを中心として進め、霊性を向上させて、神秘世界を実体験することができます。この修行体系を選択すれば今生で解脱し、悟ることも夢ではありません。

3、テーラヴァーダ

原始仏教の上座部仏教を再現しました。真理にのっとって清浄な日常生活を送ることによって、幸せな来世が約束されます。また、経典の記憶修習によって心の成熟が促され、悟りを得ることが可能です。オウム真理教の深遠な教義を徹底的に学びたい方に最適です。

※資料請求券を貼付けしたハガキ、または電話にて最寄りの本・支部までご連絡ください。入信案内等、詳しい資料をお送りします。

キリトリ線

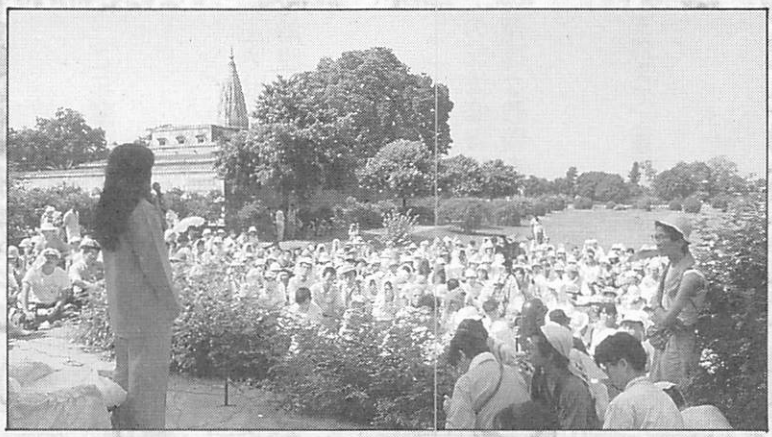
タターガタ・アビダンマ
第三識界

資料請求券

仏教の再現
修行体系

典』翻訳の成果がここに！

実践可能な在家での正しい修行。
実現する在家での解脱と悟り。
麻原尊師の説かれる深遠な法則と
賢直説根本経典』を学び、
指す方に最適の修行体系です。



正統派上座部

テーラヴァーダ

『サキャ神賢直説根本経

わかりやすい法則と経典があるからこそ、
正確な法則と経典があるからこそ、
テーラヴァーダ修行体系は
完璧に翻訳された『サキャ神
心の成熟・智慧の向上を目

テーラヴァーダの智慧の真髄

『仏典研究』

麻原彰晃尊師説法、『サキャ神賢直説根本経典』、高弟の成就体験談と盛りだくさんで、オウム真理教の教義が満載。仏典ファン、真理の探究者には見逃せない中味の濃い月刊誌です。

テーラヴァーダ修行体系を選択された方に、毎月お届けいたします。

(定価3000円)

ズバリ！ 真理のメッセージ
「リオン・テス・バシレイアス」

中波	720kHz	毎日 23:00～1:00
短波	17.710MHz	毎日 22:00～23:00
英語放送	朝の部	毎日 5:30～6:00
	昼の部	毎日 1:30～2:00

※今週の聴きどころなどを毎日紹介。
便利なテレホンサービスもぜひご利用を。
TEL 03（5370）1608

※タイアップマガジン

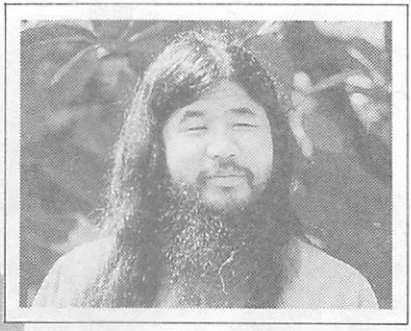
定期購読受付中！

「えんじょい・はぴねす」

※詳しいお問い合わせは、
「エウアンゲリオン・テス・バシレイアス」係まで。
TEL 03（3335）4965

モスクワからあなたに——

オウム真理教放送「エウアンゲ



麻原彰晃尊師の声が あなたの耳を直撃！

麻原尊師が電波にのってあなたのもとへ。
宗教、音楽、科学、神秘……。
盛りだくさんの内容と、
次から次への新しい発見で
眠気も吹っ飛ぶこの時間！
さあ、あなたも今日から尊師を聴こう！

"オウム真理教ネット"

※ただ今、新入会員の方に素敵なプレゼント(えんじょい・はぴねす最新号)をさしあげています。

●なお、その他詳細は下記までお問い合わせください。

〒168 東京都杉並区宮前3-8-11

"オウム真理教ネット" 事務局 TEL 03-5370-1721

好評！ あなたとオウムをつなぐ

パソコン通信、

オウムについてもっと詳しく知りたい……
教義その他について、いろいろと聞きたいことがある……
オウムの人たちの生の声を聞いてみたい……
そんなあなたに最適な情報ネットワーク

"オウム真理教ネット" のご紹介

TEL番号	03-5370-1726（三回線） Tri-P利用可能（CXAUMNET）
通信速度	1200/2400bps
通信条件	BITS-8 PARITY-NONE STOP-1
プロトコル	X-MODEM Y-MODEM(-G)
ゲストID	GUEST
運用時間	24時間
入会方法	ゲストログイン後、 SYSOPあてメールにて申請

面倒くさい手続きはいっさいありません。オウムに興味をお持ちの方、聞いてみたいことがある方は、今すぐお気軽にご利用ください。

麻原彰晃の世界 シリーズ

絶賛発売中!!

人はなぜ麻原彰晃を尊師と仰ぎ、彼のもとに集まるのか？
その答えがこの本に集約されている。
麻原尊師の多彩な魅力を満載したファン待望のシリーズ。

PART-1
幸福に至る四つの実践

PART-2
尊師、麻原彰晃が斬る！

PART-3
真実！六道輪廻

PART-4
宗教にだまされるな！

PART-5
絶対の真理

PART-6
願望成就の秘法

PART-7
仏教真理・八正道
最終解脱者のみが語り得る八正道の真の意味合い。高い解脱・悟りへ至る道を、具体的に、現代でもすぐに実践できる方法として説き明かす。
B6判　定価800円

PART-8
仏教真理　六波羅蜜
大乗仏教における在家信徒の最も重要な修行法の一つ、六波羅蜜。この修行プロセスを着実に実践しさえすれば、在家でも必ず解脱へと至る！尊師たちの体験談の特別付録付き。
B6判　定価800円

PART-9
尊師、聖地インドを行く
尊師がインドを行く。第一部では、信徒と共に行かれた巡礼の旅の全記録を、そして第二部ではなんと、今まで部外秘だった直弟子用奥儀脱法を満載！
B6判　定価750円

PART-10
仏教真理　五蘊無我

わたしたち本来のものではない五蘊（形状・容姿、感覚、表象、経験の構成、識別）を我と錯覚し、迷妄に苦しむ人間。この五蘊を証智し超越することによって、わたしたちは人間を超え、神に至れるのである。

B6判　定価650円

PART-11
自己を超えて神となれ！

――大人気を呼んだ尊師大学講演会特集――。東大、京大をはじめ、九一年の大学祭で尊師が若者に、現代における宗教の存在意義等について語られた模様を一挙掲載。

B6判　定価820円

PART-12
仏教真理　十二縁起

サキャ神賢が初転法輪でお説きになった「十二縁起の法」。魂の落下と上昇のプロセスを克明に描き、人間がこの世に生を受け、絶対的な自由の世界へ至る道程を明らかにする。

B6判　定価620円

PART-13
これが尊師！

雑誌・テレビ・ラジオにと、今大人気の麻原尊師。尊師の人気の秘密は何か？　雑誌社からの取材を中心に、様々な角度から尊師の魅力を探る。

B6判　定価570円

PART-14
宗教の条件

今、本物が明らかになる！　真の宗教の条件とは？　第三次宗教ブームと呼ばれる現在、様々な宗教の中から間違いなく本物を選び出すための条件を、あますところなく説き示す一冊。

B6判　定価570円

PART-15
絶対幸福への道

最終解脱者、麻原彰晃尊師が、幸福になるための最速・最短の道をあなたに伝授する！　あなたを確実に幸福へと導く秘法が満載の、在家修行者座右の書。

B6判　定価620円

PART-16
麻原彰晃　方便品

難解な仏典の比喩・奥儀が現代的に説き明かされた！　釈迦牟尼の深遠な教えの真髄を、最終解脱者麻原尊師が巧みな方便でわかりやすく解説。読んで、考え、実践するための、本物のお経を公開！

B6判　定価720円

PART-17
世界は尊師を待っている

転換期にあるロシアでの説法、大学での講演、インタビュー等を集めた第一部。テーラヴァーダ仏教のスリランカでの高僧との対談を集めた第二部。四十八ページカラーで尊師の幅広い活動を紹介。

B6判　定価1030円

（価格にはすべて消費税が含まれています。）

●全国の有名書店にてお求めください。弊社に直接お申し込みの場合は下記まで。

オウム出版

本社　〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17 TEL03(3439)6043 振替 東京2-109325

営業部　〒168 東京都杉並区宮前3-8-11 TEL03(5370)1598

眼ある人は目覚めよ!

タターガタ・アビダンマ

麻原彰晃 著 B6判 550円

Tathāgata Abhidhamma

真理勝者 絶対最勝の法則

原始ヨーガ、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教などすべての真理を内在した史上最強の法則。日本で初めて、サキャ神賢（釈迦牟尼）が説いた全体系が示される。

第一誦品　大宇宙の実相
第二誦品　真理勝者の救済計画

●ご注文は書店にお願いいたします。直接弊社にお申し込みの場合は、下記までご連絡ください。

オウム出版　本　社　〒154　東京都世田谷区世田谷2-6-17　TEL 03(3439)6043　振替 東京2-109325
営業部　〒168　東京都杉並区宮前3-8-11　TEL 03(5370)1598

この本をお読みになって、どのような感想をお持ちになりましたか。あなたのご意見を、ぜひ下記の「『タターガタ・アビダンマ 第三誦品』読者係」までお送りください。

〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17
オウム出版「『タターガタ・アビダンマ 第三誦品』読者係」

◆各道場のご案内◆

富士山総本部　0544(54)1267
〒418-01　静岡県富士宮市人穴381-1
東京本部　03(3327)8565
〒156　東京都世田谷区赤堤2-42-5 杉田村松ビル1F
新東京本部 03(3396)9393
〒167　東京都杉並区下井草4-4-4 井口ビル2F
大阪支部　06(397)1022
〒532　大阪府大阪市淀川区西宮原1-8-14 八光ビル2F
福岡支部　092(474)2877
〒812　福岡県福岡市博多区博多駅前2-6-15 第一渡部ビル6F
名古屋支部　052(252)0709
〒460　愛知県名古屋市中区栄5-8-14 万国ビル3F
札幌支部　011(241)4938
〒060　北海道札幌市中央区北2条西2丁目19-1 チサンホテル本館2F
京都支部　075(371)3759
〒600　京都府京都市下京区堀川通り松原上ル五軒町384 松本ビル2F
仙台支部　022(268)3904
〒982　宮城県仙台市若林区河原町1-4-20 十全会ビル2F
金沢支部　0762(51)8457
〒920　石川県金沢市京町25-20 ソフトオフィスビル2+4 2F
高知支部　0888(84)8286
〒780　高知県高知市はりまや町2-8-8 安藤ビル2F
広島支部　082(264)6250
〒732　広島県広島市南区西蟹屋4-4-18 和田ビル3F
横浜支部　045(243)8079
〒231　神奈川県横浜市中区若葉町3-41-2 コスモ伊勢佐木長者町ビル204
和歌山支部　0734(24)2859
〒640　和歌山県和歌山市駿河町42 和歌山酒販会館2F
水戸支部　0292(26)8044
〒310　茨城県水戸市中央2-2-1 HDビル6F
船橋支部　0474(66)4965
〒274　千葉県船橋市新高根6-26-18
那覇支部　098(869)7707
〒902　沖縄県那覇市安里2-4-12 嘉数グラビアハイツ5F
堺支部　0722(21)1843
〒590　大阪府堺市海山町4-168-9
高崎支部　0273(46)1573
〒370-12　群馬県高崎市倉賀野町 下稲荷前1081-5
福井支部　0776 (26) 6145
〒910　福井県福井市御幸3-3-41 東伸ビル2F
深谷出張所　0485(74)6205
〒366　埼玉県深谷市萱場441-8
渋谷出張所　03(3476)5065
〒150　東京都渋谷区道玄坂1-15-3 プリメーラ道玄坂317号

〈海外支部〉
ニューヨーク支部　212(421)3687
8 East 48th St. #2E (2nd Floor), New York, N.Y. 10017 U.S.A.
ボン支部　(0228)616647
Auf dem Hügel 48, Endenich, 5300 Bonn 1, S.R.Germany
スリランカ支部
(AUM SACCA SAṄGHA ASSOCIATION)
Sorahena, Watta, Anglugaha, Galle, Sri Lanka

タターガタ・アビダンマ　第三誦品

一九九二年九月二十七日　初版発行

定価　一五〇〇円
著者　麻原彰晃
発行者　松本知子
　　石井久子
発行所　株式会社オウム
東京都世田谷区世田谷二―八―一七
郵便番号　一五四
電話・〇三（三四三九）六〇四三
振替　東京二―一〇九三一五
乱丁・落丁がありましたらお取り替えいたします。

© Shoko Asahara 1992
ISBN4−87142−054−X　C0014　P1500E

タターガタ・アビダンマ

Tathāgata Abhidhamma

第三蘊品

ISBN4-87142-054-X C0014 P1500E 定価1500円(本体1457円)